第1章『浪江のこころ通信』

平成26年3月発行の『浪江のこころ通信～震災後3年間の記録～』には、『浪江のこころ通信』第1号（平成23年7月発行）から第30号（平成25年12月発行）までの、平成29年12月発行の『浪江のこころ通信～避難指示一部解除までの記録～』には、『浪江のこころ通信』第31号（平成26年1月発行）から第69号（平成29年3月発行）までの記事を収録しました。

この第1章では、その後に発行された『浪江のこころ通信』第70号（平成29年4月発行）から第119号（令和4年3月発行）までの記事を掲載します。広報紙発行時には、この期間、97件の記事が掲載されましたが、ここではその中から本書への再掲を承認いただいた92件の声を掲載します。

※町民の方のお名前・居住地、取材者の方のお名前・所属等は、取材時のものです。

※本書に掲載した町民の皆様の一覧は150～151ページ、取材者の一覧は152ページに掲載しています。

平成29年４月号～平成30年３月号掲載分

浪江町復興計画【第二次】を策定

ともに乗り越えよう、私たちの暮らしの再生に向けて

この時期の復興に向けた主な動き

H29. ４月　役場機能の大部分が本庁舎に戻る
４月　ＪＲ常磐線浪江駅－小高駅間の運転再開
６月　災害公営住宅「幾世橋住宅団地」第１期（22戸）が完成
８月　町内で夏まつり（心のイノベーション笑夏・サマーフェスティバルなみえ）を開催
８月　災害公営住宅「幾世橋集合住宅」（２棟80戸）が完成
９月　国道114号の特別通過交通開始
11月　町内で十日市祭を開催（浪江町地域スポーツセンター）
12月　国が「特定復興再生拠点区域復興再生計画（津島、末森および室原）」を認定
H30. １月　町内であるけあるけ初日詣大会を開催（浪江町営大平山霊園ほか）
１月　請戸漁港出初式を実施
１月　町内で成人式を開催（浪江町地域スポーツセンター）
２月　「浪江町健康関連施設整備検討委員会」が町に提言
２月　苔野（くさの）神社（請戸地区）で町指定無形民俗文化財「請戸の安波祭」
３月　浪江町東日本大震災追悼式（如水典礼さくらホール）
３月　町内で浪江町芸能祭（浪江町地域スポーツセンター）
３月　災害公営住宅「幾世橋住宅団地」第２期（63戸）が完成

あるけあるけ初日詣（１月）

請戸の安波祭（２月）

なみえの夏まつり（８月）

復興なみえ十日市祭（11月）

髙橋　俊正さん（赤宇木）

取材者：ＮＰＯ法人市民公益活動パートナーズ　古山・松田
取材日：１月29日　「平成29年４月 広報なみえ掲載」

他所では死にたくない。だから、今、帰るための準備をする

髙橋さんは若い頃からものづくりが大好きで、東京で大工さんをされていました。ご両親の介護のために津島に戻り、大工業と農業を兼ねながら、「りんどう」の栽培や畜産業にも挑み、牛を増やしながら、ようやく軌道に乗った頃に震災に遭いました。

震災後は、牛の世話をするために、避難をした福島市内の弟さんの家から約 1 か月ほど津島に通ったそうですが、7 月に牛を手放し、岳温泉「あづま三番館」に避難。その後、二本松市の仮設住宅を経て、現在、二本松市針道で花き栽培をしながら暮らしていらっしゃいます。

▲普段余り聞くことのできない、花き栽培のお話や農業にかける心意気をたくさん聞かせていただきました。

◆浪江のまちや人に対する、今のお気持ちはいかがですか

「浪江のこころ通信」を読むと、町のみんなの様子はよく分かるんですよ。だけど、最近、帰還を前提に無理に急いでいるような気がします。農業は？商工業は？浪江町でサラリーマンをしていた人たちは？と思うんです。

特に、農業は技術と人手がなくては再興できません。そこが忘れられているような気がします。金銭的な支援として、国や県は耕作地の規模に応じて、あるいは組合などの組織に対していろいろな補助をしているようですが、私は一人でとことんやってみたいと思っています。とはいっても、手伝ってくれる人がいなければ仕方がない。町はシルバー人材センターなどを通じて、浪江に戻った高齢の方々が何かできるような仕組みを作って欲しいですね。

また、町に戻った時に、農業の基盤整備はどうなっているかが心配です。水路の整備やダムの除染、水の確保はどうするのかなど、気がかりなことはたくさんあります。

◆今の暮らしぶりを教えてください

二本松市の仮設住宅にいる時から、この針道に毎日通って、地域の達人に学びながら、花づくりを極めたいと取り組んできました。たまたま、この家に以前住んでいたご夫婦が大玉村に移られたので、越して来ました。

というのも、私はいずれ浪江に戻ります。その時に、花き市場で高値の取引ができる、より品質の良い「りんどう」などの花を作るために、現場での経験と技術をここで研究しています。針道の気候は津島と異なり、夏は暑く、風が抜けない風土ですが、今はハウスと露地栽培の両方を試しながら、流行の色や花の付き方をいろいろ試しています。

▲「夏の間は忙しくて、げそっと痩せてしまうんですよ」と、髙橋さん。80cm以上に仕上げたりんどうの花束は価値が高いそうです（ご本人から写真提供）。

メインとなっている「りんどう」の出荷は6月半ばから10月頃までですが、そのピークはお盆からお彼岸です。夏の繁忙期は、地域の女性2人にも手伝ってもらいながら、仕事をしています。

◆髙橋さんのこれからの目標は何でしょうか

出荷時期の異なる10月から寒咲きの「輪菊」や「トルコききょう」などを市場向けの商品として作りながら、ミカンやデコポン、レモンなどの柑橘類はどうかとか、「ゴクラクチョウカ」や「デンファーレ」、「ハラカンタ（ジャカランダ）」などの寒さに弱い花々はどうかなど、日々勉強中です。また、津島では冬場の仕事として、伝統的に菜種やエゴマ、椿、トチの実、アケビなどの油搾りをしてきました。ぜひ復活させたいですね。そのためにも、まとまった耕地が必要ですし、再び牛も飼いながら、繁殖にも力を入れたいです。

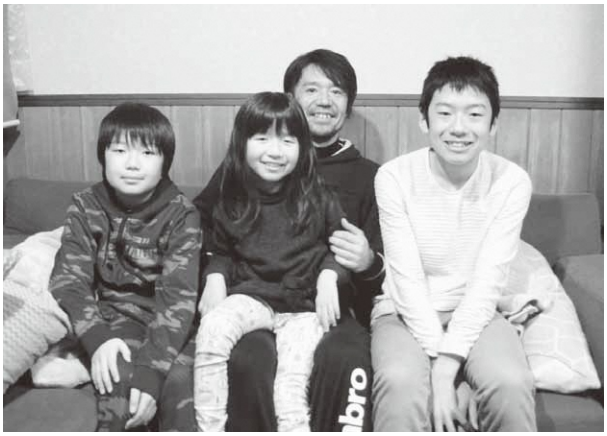
あと5年を目途に、帰郷に向けて本腰を入れて準備をしていくつもりです。

浅野　勇太さん（権現堂）

取材者：ＮＰＯ法人山形の公益活動を応援する会・アミル　柴田
取材日：１月29日　「平成29年４月 広報なみえ掲載」

山形に来たときは、ぜひりんご狩りを楽しんでください

理美容店「カットハウスハッピー」の常務取締役を務め、浪江店の店長をしていた浅野さん。現在、山形県白鷹町で家族５人で暮らしながら、妻・祥子さんと朝日町でりんごの農園を営んでいます。３人のお子さんもすくすく成長しており、長男・秦くんと次男・嵐くんはサッカー、長女・凜ちゃんはピアノを頑張っています。３人の冬の楽しみは、近くのスキー場で友達とスキーやそりで遊ぶことと教えてくれました。



▲左から、嵐くん（小4）、凜ちゃん（小1）、勇太さん、秦くん（小6）
妻・祥子さんも一緒に、家族揃ってお話を聞かせてくださいました。

◆子どもたちとの生活を考え浪江と環境が似ている白鷹町へ

震災当時は、新店舗を立ち上げる準備のため仙台に単身赴任しており、地震後、家族とまったく連絡が取れず原発のニュースを見てとても不安でした。数日後、電話がやっとつながり、妻の家族と一緒に仙台に避難しました。長男が４月から小学校に入学する予定だったので避難先の小学校に通い始めました。ですが、都会に来てあまりにも環境が変わり馴染めない様子だったので、専門学校の時の同級生を頼り、浪江に雰囲気が近い白鷹町に引っ越してきました。

白鷹町は環境がのびのびしているし、町の方があたたかく、子どもたちは地域に溶け込んでくれています。入学式はすでに終わっていたのですが、特別に長男一人だけの入学式をしていただきました。今年卒業なので、他の子と同じように卒業アルバムに入学式の写真が載ることをありがたく思い、成人して大人になっても、一生の友達となるよう大切にしてほしいです。

また、子どもたちがサッカーのスポーツ少年団に入り、私も経験者なのでコーチを始めました。スポ少を始めたことで、地域とのつながりができ、どこに行っても誰かに会った時には声をかけてもらいます。最初の一年は孤独を感じていましたし、他の浪江のお母さん方からはいじめの話も聞き不安でしたが、年上のお兄ちゃんお姉ちゃんたちが随分声をかけてくれ、救われました。知らない土地知らない人の所に来て、子どもながらに不安があったと思いますが、よく頑張ってくれたなと思います。逆に、子どもたちが頑張っている姿を見てりんご栽培とスポ少の指導者をしてみようと励まされました。長男は、海のある風景や散歩した妻の実家の浪江の風景を覚えており、いつか町に入れるようになれば、ここにいたんだよと浪江に連れていければいいですね。

◆りんご農家として新しい挑戦

「カットハウスハッピー」は、浪江駅前にあり、低料金の理美容店でした。たくさんのお客様に来ていただいていたこと感謝しています。このこころ通信で、お客様の元気な姿や事業を再開した情報を嬉しく見ています。

震災後一年は、宮城県の震災復興の仕事につき週末だけ帰る生活をしていましたが、朝日町のりんごに興味を持ち訪れた農業支援センターで、師匠の阿部為吉さんに出会ったことで、りんごは面白いと思い就農に至りました。耕作放棄地を開墾して畑を作り、苗木を植えて一からのスタート。一昨年まで師匠の所で働き教わりながら朝夕で自分の畑の管理をし、昨年からは妻も仕事に加わってもらい、りんご約３００本、ラフランス約１５０本を育てています。日に当てる無袋栽培を行っており、天災や病害虫に弱く手はかかりますが、甘いりんごができます。もし山形に来たら、皆さんにりんご狩りを楽しんでもらえたらと思っています。

脇坂　明さん（権現堂）

取材者：茨城ＮＰＯセンター・コモンズ　菊池
　　浪江町復興支援員　八橋・森・小川
取材日：２月10日　「平成29年４月 広報なみえ掲載」

これからは楽しいことをやり続けたい

脇坂さんは、現在水戸で一人暮らしをされていますが、プロの資格を持っている社交ダンスをしたり、カラオケをしたり、自分で作詞してＣＤを作ったり、舞台に挑戦したりと、充実した生活を送っていらっしゃいます。

▲脇坂さんが作詞し、歌って作ったＣＤ「あの日を超えて」「天国からの手紙」と、出演した「１万人のゴールドシアター2016」のパンフレット

◆妻と一緒に避難所を転々として

３月11日、介護が必要な妻をベッドに寝かせていた時に地震が発生しました。しばらくすると町の防災無線で津波が来るので直ぐに逃げるよう放送があったため、妻を車に乗せて井出に住む娘のところに避難し一晩過ごしました。

次の日には放射能が漏れ原発が危ないとの情報があったため、原町に移動しました。そして、３月12日の原発の爆発によって、更に西に逃げて福島市まで移動し避難所にたどり着きましたが、避難所暮らしは介護が必要な妻と一緒だったため、トイレが本当に困りました。

その後、福島県内や茨城県内の親戚宅や知人宅を頼って10か所ぐらい転々と避難し、２年ぐらい前から現在の水戸の借上げアパートに落ち着きました。妻は、息子が経営している介護施設に入居させているため、月に１回～２回面会に行きますが、現在はひとり暮らしです。

◆精神的損害に対する補償について納得することができずに…

この地震によって原発が爆発し、避難暮らしを余儀なくされたことに対する精神的損害に対する補償について、交通事故と同じ基準で算定されていることに納得することができず、国・県・町・マスコミ等に対して意見書を送付したり、県内外の各地でシンポジウムを開いて発表したり、署名集めなどの活動を展開しましたが、一緒に活動してくれる人も現れなかったので、気持ちを切り替えてこれからは楽しいことをして過ごそうと思いました。

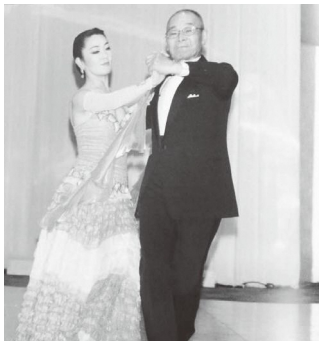
◆一人暮らしでも趣味があれば生きがいと過ごせます

現在の楽しみは、まずひとつは銀行員時代に過ごした茨城県内外の各地を思いながら作った詩や、恩人を偲んで作った詞にプロの先生に曲をつけてもらい、自分で歌ってＣＤを作ることです。今後は蜷川幸雄さんの奥様へＣＤをプレゼントすることが目標で、そのために月に２回程度カラオケに通っています。

もうひとつは、自分が最も得意とする社交ダンスです。社交ダンスはプロの資格も持っていて、銀行員時代には茨城県アマチュアダンス協会を立ち上げて、社交ダンスの普及に努め、銀行を退職後は水戸でダンス教室を開き、10年ぐらい社交ダンスの指導をしてきました。現在も週に２回程度ダンス教室に通っており、昨年はつくば市のホテルで開かれたダンスパーティーにもデモンストレーションで踊ったりしました。

また、昨年はさいたまスーパーアリーナで開催された企画・原案蜷川幸雄さんの「１万人のゴールドシアター２０１６」という舞台に応募した結果、書類選考を通り舞台に出演することができました。今年もチャンスがあればチャレンジしたいと思っています。

このように今はひとりで寂しい時もありますが、身体もいたって健康で大好きな社交ダンスやカラオケをしながら充実した生活を送っております。



▲つくば市のオークラフロンティアホテルつくばで開かれたダンスパーティーに、デモンストレーションでダンスを披露

「あの日を超えて」

作詞　脇坂　明

1
山脈（やまなみ）はるか　阿武隈（あぶくま）の
青き海原（うなばら）美しく
あの日あの時　地響きに
ゆれ動き
母なる海は　魔の山となり
押し寄せてきた
なすすべもなく　父母と
多くの命
多くのくらし　うばわれた
ああ　あの日を超えて
呼べど答えぬ
わが故郷（ふるさと）へ　いつの日か

2
四季おりおりの　麗しき
恵みゆたかな　山や川
あの日あの時　海辺から
風にのり
見えぬ汚れが　魔の手をひろげ
染めつくされた
救いをもとめ　呼ぶ声も
無念の涙
すまいを追われ　散り散りに
ああ　あの日を超えて
住民（ひと）はみんなで
わが故郷（ふるさと）へ　いつの日か

佐藤　信一さん（権現堂）

取材者：ＮＰＯ法人市民公益活動パートナーズ　古山
取材日：２月25日　「平成29年５月 広報なみえ掲載」

私にとって「浪江」は、大人になってからの人生の半分です

▲『浪江小学校物語』では語り尽くせなかったお話しもたくさんしてくださいました。
第69号（平成29年３月号）に掲載された横山和佳奈さん（当時６年生）は、その時の教え子のお一人だそうです。

佐藤信一さんは、現在、兼務校である福島市立岡山小学校に勤務されています（本務校は浪江町苅野小学校）。岡山小は在校生が407名で、浪江町のスクールバスで６名の児童（うち３名はこの春卒業）が通っています。震災直後は市内の各学校にスクールバスなどで多くの児童が通学していましたが、徐々にその人数も減っているそうです。

震災当時は、東京のＮＰＯ法人が制作した紙芝居『請戸小学校物語－大平山をこえて』で広く知られるようになった請戸小学校で教務主任をされており、折りに触れて避難の様子を詳細に伝えてこられました。今回の取材も、当時のお話しからお伺いしました。

◆あの時に６年生だった子どもたちが、今、請戸を語り継いでくれています

まさに、あの日は『請戸小学校物語』そのものでしたね。卒業式準備のため、体育館には５年生がいて、「しゃがめ！動くな！」と指示を出して体育館の出口を開けに行きましたが、２分間くらい扉ごと左右に大きく振られました。揺れが収まり、教頭先生から避難を告げられ、既に下校していた1年生を除く、２年生～６年生までが校庭に集合しました。私は、取り残された子どもがいないか確認するために校舎の２階に行った時、海を見ましたが、何も変わった様子はありませんでした。

６年生を先頭に大平山に移動し始めましたが、浜街道は大渋滞。駆けつけた保護者の方々には、学校として全員避難を了承いただき、子どもたちを順番に横断させながら、田んぼのあぜ道を進みました。最後尾にいた私は、山を登り始めて直ぐに津波らしい音を聞きましたが、夢中で山を登っていた子どもたちにはおそらく解らなかったと思います。

私は大平山の避難場所を確認するために一度下山しましたが、辺りは津波の痕跡がもう酷い状況でした。全員で６号線側に下山し、私はバスの手配をお願いするために役場に向かっていましたが、偶然通りかかったパトカーに伝言をお願いすることができました。子どもたちと先生方は、同じ場所に避難していた地域の人たちと共に、紙芝居にもあるように通りかかった運送会社のトラックに乗せてもらい、役場で保護者たちと合流することができました。私も、戻る途中でトラックに乗せてもらいました。

子どもたち全員が無事だった最も大きな要因は、避難のタイミングや選択が全て合っていたことによると思っています。日頃から地元、請戸の人たちの学校に対する理解や協力、災害発生当時の先生方の冷静な判断や周りの人たちの支えなど、本当に多くの人に助けられた命だと感じています。

◆これから先、何が出来て、どう進むか、思案中です

私の自宅は役場のすぐ近くでしたが、家族との連絡は取れませんでした。翌朝、玄関の張り紙を見た妻と合流でき、相馬の実家に２日間避難しました。原発事故後に福島市のあづま総合体育館に行きましたが、犬がいたので車で寝泊まりしました。その後、会津若松市の県立会津学鳳高校へ。当初は、高校の先生方が運営する避難所でしたが、避難者で自治会組織を結成し、支援物資の配給などを行いました。

３月下旬には相馬に戻ったのですが、浪江町教育委員会から招集があり、福島市内の小学校に兼務辞令が出て勤務することになり、福島市にアパートを借りました。現在もここで妻と暮らしていますが、浜っ子なので、暮らすならば海の見えるところがいいですね。

浪江町は４月から帰還が始まりますが、子どもたちが戻れる環境にならないと、保護者の方々も帰ろうとする状況にはならないでしょうから、町内の学校がどうなるか大変気がかりです。

私の教師生活もあと10年ほどですが、出来ることなら最後は浪江で迎えたいと願っています。

横山　悟さん（棚塩）

取材者：ＮＰＯ法人市民公益活動パートナーズ　古山
取材日：２月28日　「平成29年５月 広報なみえ掲載」

商いを通じて、浪江町とつながっていたい

横山さんは、福島市内の繁華街、パセオ通りで『やきとり 土竜』を営んでいらっしゃいます。この震災で一度は諦めた将来の夢でしたが、「やっぱり自分で飲食店をやりたい」という強い思いから、平成25年２月、福島市内にある飲食店のチャレンジショップ「屋台村」にて創業しました。今に至るまでには、さまざまなご苦労があっただろうと思いますが、平成27年７月に現在の場所に移転。本格的にオープンし、今年で丸２年を迎えるお店は順調とのことです。

▲ご自慢の「磐城壽」と「大堀相馬焼」を前にして。
鈴木酒造店の「ゴールデンスランバ」は、3.11に合わせて昨年から造られているお酒で、お店では当時を思い起こしながら「献杯」をしているそうです。

やきとり 土竜（もぐら）
福島市万世町5－5 相良ビル２階
TEL 024(573)9555
営業時間：17時30分～24時
定休日：毎週日曜日、第１・第３月曜日

◆料理人から会社勤めを経て、一念発起。チャレンジしました

３月11日は勤めていた会社の中で地震に遭いました。「何が起こったんだ？」という記憶しかないですね。自宅には戻れず、原発事故の恐怖から「とにかく遠くへ」と、福島市で両親や弟妹と合流して、知人を頼って新潟県柏崎市へ避難しました。あの時は、ガソリンも手に入らず、僅かな燃料で必死に雪道を走ったことを覚えています。

何とか柏崎に到着し、知人宅に一泊しましたが、次の日から柏崎市立体育館で避難生活が始まりました。柏崎の方々は中越地震を経験していたため、地震直後、迅速な受入態勢をとってくれていて、私たち避難者を温かく迎え入れてくださいました。炊き出しや、励ましの言葉をいただいたことを、今でも本当に感謝しています。

柏崎市立体育館から市が用意してくれた旅館に移り、１、２か月後に市が提供してくれた住宅で過ごしました。

新潟で約１年の避難生活を送った後、平成24年３月、生活基盤を福島市にと決めて、単身で戻りました。１年ほど会社員として過ごしましたが、自分らしい生き方をしたいと思い、起業を決断しました。カウンター８席の小さな「屋台村」の店からのスタートでしたが、さまざまな人や同じ志を持つ仲間と出会い、そこには勤め人とは違った新しい世界があり、同時に「商い」を学ばせていただきました。現在の自分やお店があるのは、この経験が自信につながったのだと思います。

◆故郷の良さを、私なりに伝えたい

私の店のコンセプトは、素材にこだわった会津地鶏の本格焼き鳥と、地酒をゆっくりと楽しんでいただく「大人の焼き鳥店」。そして、もう一つは「浪江の良さを知ってもらうこと」。震災前は身近過ぎた鈴木酒造店さんの「磐城寿」や、歴史ある大堀相馬焼が、震災を機に、改めて良いものだと気付き、浪江町の伝統的な文化にも触れて喜んで欲しいと思いました。

お客さまの約９割が福島市内の方で、大堀相馬焼はどこで作られているのか、或いは「磐城寿」の蔵元が山形県長井市にあることは知っていても、元々浪江のお酒だとは知らない方々も結構いらっしゃいますが、「美味しいね、どこのお酒なの？」とか、「この酒器は二重構造で珍しいね」などと興味を持ってくださいます。また、偶然に浪江の方が来られることがありますが、「大堀相馬焼で寿を飲めるなんて懐かしいね」と言ってくださることが嬉しいんです。

浪江町の良さや頑張っている人々がいることを、この飲食業の仕事を通じて伝えていくことで、町の復興を応援出来るのではないかと思っています。故郷を離れて６年が経ちましたが、遠くからでも浪江町と細く長くつながっていきたいと思います。

三瓶　春江さん（南津島）

取材者：ＮＰＯ法人市民公益活動パートナーズ　古山
取材日：３月10日　「平成29年５月 広報なみえ掲載」

「津島の家の枝垂桜（しだれざくら）の下、家族みんなでピクニック」が夢です

▲「子どもたちに頼りにしてもらっているうちは、母としてできることは何でもしてやりたい」とおっしゃる春江さんは、本当に明るい“おかあさん”。家族への思いは尽きることがないようです。

浪江町津島で石材加工業「スガタ彫刻」を営む夫を手伝いながら、家事や内職に忙しい日々を送っていらっしゃった三瓶さん。

現在、家業は福島市郊外のご自宅から近い所に仕事場を構え、ご主人と長女の夫、次女の３人で頑張っていらっしゃるそうです。お家は、ご夫妻と夫の両親、長女夫婦と孫３人、次女の10人が同居する大所帯。長男夫婦も近所にお住まいとのことで、「家族12人全員で週末、食卓を囲めることが一番の幸せ」とおっしゃいます。

◆避難には、家族のドラマがたくさんありました

震災が起きた時、長女夫婦は留守でしたが、私や夫の両親は家にいました。車が大きく揺れて、石材も壊れました。家の中は滅茶苦茶で、屋根のぐしも殆ど崩れました。余震も酷かったけれど、幸い家族に怪我はありませんでした。

私は津島保育所にいる上の孫が気になって駆けつけると、子どもたちは薄着のまま園庭に避難したようで、とても寒そうでした。孫を連れて、６キロほど離れた実家の母の様子を見に行きました。独りで駐車場にいた母は、どんなに心細かったでしょう。

母を連れて自宅に戻り、余震が収まるまで車に待機した後、家の片付けをしました。とはいっても、家族が座れるよう、茶の間のスペースを確保しただけでしたが、夜になっても余震は続き、全員が茶の間で過ごしました。

翌12日は、自宅と会社の片付けをしていました。区長さんから「町から多くの人たちが避難して来るので、炊き出しを手伝ってほしい」と言われ、近所の人たちや娘たちと一緒におにぎりを作りました。家の下に南津島の上集会所があり、中下グラウンドは避難して来た人たちの車でいっぱいでした。

14日には３号機が爆発したことをテレビで知って、小さい孫たちを連れて遠くへ逃げようということになり、東京に住む夫の妹を頼りました。深夜に出発し、15日の夕方にようやく着いたのですが、埼玉県越谷市のガソリンスタンドで受けた親切は今でも忘れられません。既に給油量の制限があったにもかかわらず、「満タンに入れていいよ」と言ってくださったのです。今でも本当に感謝しています。

◆家族が一緒に住める家を探し続けて

平成23年３月下旬には津島に一時帰宅をしたり、二本松市の親戚の空き家を下見するなど、家族一緒に暮らせる算段をしました。４月に入り家族全員で二本松市に移りましたが、二次避難所の情報が入り、猪苗代町長浜「レイクサイドホテルみなとや」に子どもたちや孫、両親たちは４月下旬から７月までお世話になりました。

その間、仕事を再開していた夫は、宮城県角田市の仕事場へ通ったり、福島市内に拠点を移したりと大変な日々を送っていました。私も二本松市から田村市、福島市と住まいを変えながら、再び家族全員で暮らせる家を探し続けました。３年前、たまたま今の家が広告に掲載され、リフォームをして平成27年４月に入居し、ようやく家族全員が再び一緒に暮らせることになりました。

津島には、今住むことができなくても、きちんと除染や土地改良をして、いつでも訪ねて一日過ごせるような状態にして欲しい。行ったり来たりになっても、伝統芸能や盆踊り、運動会などを楽しめるといいですね。思い出がそこにあるんですもの、故郷を忘れずに済みますし、子どもたちにも孫たちにとっても津島が生き続けると思うんです。

三瓶　恵美さん（赤宇木）

取材者：認定ＮＰＯ法人市民公益活動パートナーズ　古山
取材日：４月24日　「平成29年６月 広報なみえ掲載」

自分の夢を応援してくれる家族がいる、本当に幸せなことです

震災発生当時、福島県立双葉高校の２年生だった恵美さんは、午前中の授業を終えて、友人たちと浪江町で昼食をとった後、帰宅する途中で地震に遭いました。幸い、仕事に出掛けていた母親と合流し、車で帰宅することができました。祖父母と両親、姉と恵美さんの家族６人で暮らしていた自宅は、家の中の物が落ちた程度だったそうです。

現在は、働きながら大学院に通っているため、福島市で一人暮らし。休日には、仲の良い友人たちと会ったり、南相馬市でのボランティア活動に参加したりするなど、アクティブな日々を送っていらっしゃいます。

▲「医療関係の仕事を選んだ友人が多いですね」と、恵美さん。こうした若者たちが福島に戻り、地域で活躍されていることは、本当に心強いことです。

◆震災当日より、翌朝からが大変でした

朝、防災無線から次々と原発事故による避難指示が流れていました。家には、浪江町内の親戚や友人が20人ほど避難して来ました。自宅近くの集会所や津島小中学校、保育園などにも、大勢の人が避難しており、家族や近所の人と炊き出しのおにぎりを作り、届けました。

家にいた親戚の人がもっと遠くへ避難するために少しずつ減り、近所の明かりがポツポツと消え始めた頃、私たちも家族会議をして避難することにしました。しかし、どの避難所もすでに満杯で、一旦は郡山市の親戚宅に身を寄せ、その後祖父母と父は県農業技術センターに、私と母はそのまま親戚宅に２か月間お世話になりました。まもなく父は南相馬市に単身赴任をし、姉は大学進学のため茨城県へ移りました。

双葉高校のサテライト本校が郡山市のあさか開成高校の中にでき、借上げ住宅から通いました。双葉高校３学年約１６０人のうち、１００人ほどが県内各地のサテライト校に行きましたが、サテライト校の開設によって双葉高校を卒業できたこと、また、間借りしている高校でも新たな友人ができ、嬉しかったです。その頃、早稲田大学の先生や学生さん方が学習支援のボランティアに来てくださり、進学を希望する私にはありがたかったです。

関東圏の大学に行くのは少し怖かったのですが、埼玉県にある日本医療科学大学で看護師と保健師を目指しました。最初は、浪江や避難の話はなかなか言い出せずにおりましたが、勇気を出して話し始めると大学の友人たちは皆耳を傾け、温かい言葉をかけてくれました。

◆「資格は一生ものだよ」という母の言葉と、病気がちだった祖父が、進路を決めるきっかけになりました

保健師の仕事を目指すようになったのは、赤ちゃんから高齢者まで、地域の人たちを身近でケアできる職業であると感じたからです。また、震災後の福島では原子力発電所事故の避難の影響でさまざまな健康被害が出ていることを知りました。保健師として必要な知識を学びたいと思い、昨年４月から福島県立医科大学の大学院に通い始め、現在は福島市で暮らしています。自分の夢を応援してくれる家族がいるからこそ、今の私がいると強く感じています。

大学院では、医科学研究科（修士課程）災害・被ばく医療科学共同専攻で、長崎大学との共同の講義や実習もあり、来年（平成30年）３月に卒業予定です。就職は自治体の保健師を目指しています。

週末のボランティア活動には大学の先生も関わっていて、南相馬市小高区内で帰還した住民の方とサロン活動をしたり、畑作りをしています。震災前に農家を営んでいた人がほとんどで、毎回畑作りの先生方から指導を受けています。小高の皆さんが私の顔や名前を憶えてくださることが本当に嬉しく、またやりがいにもつながっているんです。

鈴木　千尋さん・敏範さん（権現堂）

取材者：認定ＮＰＯ法人市民公益活動パートナーズ　古山
取材日：４月30日　「平成29年６月 広報なみえ掲載」

震災からの６年間、本当にいろんなことがありました

避難先で出会ってから丸５年。平成28年５月に入籍し、平成29年４月22日、取材日のつい１週間前に結婚式を挙げられた千尋さん。夫の敏範さんにもお話しを伺うことができました。

素敵な偶然やさまざまな出来事を乗り越えて夫婦になられたお二人のこれからが、幸多いものであることをお祈りしたいと思います。

▲「出会った頃は、頼りがいのあるお兄さん、お父さんみたいな感じだったんです」と千尋さん。ほのぼのとしたインタビューになりました。

千尋さん　私は、福島県立いわき総合高校２年生の終業式を終えたばかりで、震災当日は祖父の四十九日にあたり、納骨式でした。集まっていた親族が帰り、一緒に暮らす祖母と私、久しぶりに山口県から戻った母とで片付けをしている時でした。普段はおとなしい猫が鳴いたり、暴れたりして不審に思ったら、いきなり激しい揺れで、家の基礎はズレました。

その日の夜は、自宅の駐車場に停めた車で過ごし、翌朝のテレビを見て、直ぐに３人で津島小学校に避難しましたが、原発事故が起こり、町の避難指示を待って移動。二本松市立岳下体育館で約２週間過ごしました。４月に入ってから、祖母と二次避難所の岳温泉に移り、そこで夫と出会ったんです。

敏範さん　僕の家は津島で、震災直後は栃木県に避難していましたが、福島に戻って岳温泉にいました。僕の又従弟たちと妻が親しくしていて、いつも一緒に遊んでいた５人グループでしたね。

千尋さん　４月末に高校が再開されることになり、いわき市で一人暮らしを始めました。５月中旬、岳温泉の友人たちが遊びに来ることになったんですよ。でも当日来たのは夫だけ。夫に片思いしていた私への作戦だったみたいです。それがきっかけで付き合うようになりました。

中学の頃、ハードカバーをよく読むようになり、本や出版に関わる仕事がしたかったので、司書の資格が取れる宮城学院女子大学（仙台市）に進みました。けれども、将来のなりたいものがなかなか見つからず、どうするか悩んでいるところに、大学の紹介もあって、車が好きな点や得意なパソコン操作を活かせる損保会社に就職しました。勤務地は福島市で、損害保険の事故対応業務をしています。楽しい職場ですよ。

敏範さん　妻とは３歳違いです。南相馬市の会社を震災前に辞め、交際していた頃は物流センターで仕事をしていました。今は、神奈川に本社がある産業機器卸売商社で、職場は大玉村です。実家の家族は、ここから15分ほどの二本松市内に住んでいます。

そういえば、震災の年４月下旬に避難所を出てから、妻の祖母が住んでいた郭内仮設住宅では、隣同士だったんですよ。

千尋さん　大学３年の時、山口で仕事をしていた母が亡くなりました。平成26年の夏から冬にかけて福島で療養をしていたのですが、戻った途端の12月でした。夫には、その時に本当に支えて貰いました。うちの猫ナナは、その母の形見です。

祖母は、私が福島で就職したら互いに目の届くところに居たいと、平成27年８月にこの家を譲り受けました。12月には夫からのプロポーズを受け、大学卒業と就職を待って平成28年５月に入籍しました。

帰れるものなら浪江に、と思います。幼い頃から慣れ親しんだ町ですから、家をリフォームして住みたいです。でも、仕事や買い物など日々の生活を考えると、当分は二本松でしょうね。大型商業施設が出来たら、若い世代も帰るきっかけになるかもしれません。

熊田　伸一さん（請戸）

取材者：認定ＮＰＯ法人市民公益活動パートナーズ　古山
取材日：３月31日　「平成29年６月 広報なみえ掲載」

これから先のことは、孫が中学校を卒業するまでに考えます

▲別棟の集会所の軒先で。この集会所から団地と地域の方々の新しく、賑やかな交流が始まるといいですね。

平成25年６月に熊田さんに最初の取材をした時、福島市笹谷東部仮設住宅（以下、笹谷東部）の自治会長をされていました。そして、再び会長を今年３月末まで務められ、現在は、転居先の北沢又団地２号棟の管理人をされています。

この北沢又団地は、集合住宅６棟と戸建て住宅70戸を抱える大きな復興公営住宅団地です。集合住宅１号棟～４号棟は1月末の入居開始で約100世帯。５号棟は３月末に、そして６号棟は間もなく完成します。ペットが飼える戸建て住宅も３月末から入居が始まりました。住民のほとんどは浪江町の方々です。

一方、笹谷東部には、転居の準備をされている世帯が若干残っていらっしゃいますが、自治会は取材に伺った日が解散当日でした。仮設住宅の撤去にはまだ猶予があり、サークル活動を行っている住民のために東集会所を開けているとのことでした。

笹谷東部と北沢又団地、両方のお世話は、気苦労が多いのではないかと推察しますが、相変わらず穏やかに、前回から約4年の来し方をお話しくださいました。

◆今、ご家族はどうされていますか

検診関係の仕事をしていた妻は、昨年３月に退職しました。この北沢又団地には、市内小倉寺の介護施設にいる91歳の母と私たち夫婦が住むつもりで入居しましたが、母は不自由な車椅子生活のため、自宅に戻ることはなかなか難しそうです。

娘家族は、同じ団地に住むことになりました。孫の優希は今年、岡山小学校を卒業し、福島第三中学校に進学します。残念だったことは、中学校進学を決める時期と、町の小・中学校通学に伴うスクールバスに関するアンケートの実施時期がずれてしまい、団地から近い信陵中学校ではなく、遠い中学校に通うことになったことです。

これからの住まいについて、妻は「海が見える所がいい」と言っていますが、優希が中学校に行く３年間の間に、これから先のことを家族でいろいろ検討したいと思っています。

◆団地での暮らしはいかがでしょう

北沢又団地では、１号棟～４号棟の管理人とＮＰＯ法人みんぷくさんが協力して管理人会を立ち上げており、ここの集会所は周辺地域の方々にも使っていただくことを目的に、別棟になっています。

その集会所で、４月11日に初めてのイベント「キャンドル・ナイト」が開催されます。笹谷東部にも来てくださっていたキャンドル・ジュンさんに加えて、ＮＨＫ教育テレビでお馴染みの「けっさくくん（谷本賢一郎）」も来てくれることになっています。

また、震災の年にデビューした歌手、高橋樺子さんのコンサートのお手伝いもしています。彼女は浪江町ばかりでなく、双葉郡の仮設住宅集会所などを慰問してくれたんですよ。４月25日には、「宗右衛門町ブルース（昭和47年12月５日／日本クラウン）」で有名な平和勝次さんとのジョイントコンサートを、福島市の「とうほう・みんなの文化センター（旧福島県文化センター）」で行います。その他にも、県外からの議員団や大学からの視察などに同行し、仮設住宅や浪江町を案内したりしています。

それもこれも、大震災と原発事故があったからこそのこと。私たちが避難中にいただいた多くの支援への恩返しが少しでもできればと思って取り組んでいます。何事もなく浪江町に居たらあり得なかったことです。出会いを大事にしていきたいですね。

岡部　正人さん（権現堂）

取材者：認定ＮＰＯ法人市民公益活動パートナーズ　古山
取材日：５月17日　「平成29年７月 広報なみえ掲載」

避難先の桑折町で得た知恵や経験を活かして、これからの浪江の役に立ちたい

平成27年８月から、桑折駅前団地の初代自治会長を務める岡部正人さん。

平成22年１月にお母様が亡くなり、家の片付けや大掃除に追われている時期に震災が起きました。あの日は、一人で拭き掃除をしていたそうですが、家がすっかり片付いていたため被害もなく、ライフラインも止まらなかったので、のんびりしていたそうです。

避難から桑折町の応急仮設住宅、桑折駅前団地（災害公営住宅）へと、暮らしは目まぐるしく変わりましたが、常に「何かお役に立ちたい」という思いを強く抱きながら、しかし軽やかに周りの方々のお世話に取り組んでおられます。

◆避難中、辛いことは何一つ無かった。運がよかったんですね

平成23年３月12日の朝６時頃、いつもお世話になっている近所の女性から避難指示のことを教えられ、車に便乗して津島保育所に避難。１００人ほどでしたが、津島の方々がとても良くしてくださって、夜は温かいお味噌汁に温かいおにぎり、漬物などを頂きました。ストーブもあり、本当に恵まれていました。

３月15日、もっと遠くへ避難するようにとの指示があり、一緒に避難した女性は迎えに来た娘さんの車で避難することになり、車を貸してくださったんです。

翌16日に二本松市役所で手続をして、３００人くらいの方が避難していた東和体育館に行き、４月10日までいました。浪江の仮役場がすぐ傍にあり、支援物資の受入基地もあったので、衣食住に不自由することはありませんでした。30～40人を１班として８班を編成。一人で避難し身軽だった私は、８班の班長として役場との連絡や支援物資の仕分けなどを手伝ったんですよ。後に桑折駅前応急仮設住宅の自治会長をされた川合さんも一緒でした。

猪苗代町の中ノ沢温泉「平澤屋」に二次避難をすることになり、川合さんと息子さん、私が相部屋でした。温泉には７軒の旅館があり、それぞれ世話人を決め、私がその代表となって町との交渉や支援物資の仕分けをしました。４月に入るとあちこちに仮設住宅が出来始め、川合さんが桑折町の仮設住宅に入居。聞くと住環境が良さそうだったので、７月１日に私も入居しました。

南相馬市で浪江町民の一時立入りの添乗員をしたり、浪江町桑折出張所の臨時職員を勤めた後、自治会の仕事に携わるようになりました。

▲岡部正人さんを真ん中に、[右] 妻の崔淑華さん（日本語読み：サイ　シュクカ／中国語読み：ツイ　シュウファ）。[左] 娘の岳瑋瑩さん（日本語読み：ガク　イエイ／中国語読み：ウェイ　ユン）

◆桑折町での新たな生活。これからの浪江

平成27年４月に中国遼寧省（れいねいしょう）の女性と結婚しました。20才になる娘は美容師を目指して勉強しています。よくできた妻で、私には至れり尽くせりの上、倹約家で綺麗好き。趣味は洋服のリフォームと貯金。本当に幸せです。

私は、桑折駅前団地自治会会長として、集会所を活用したサロン活動や周辺の花壇整備などを積極的に行い、団地と地域住民との交流を図りながら、地域への貢献を心がけています。桑折町役場や地域の人たちは本当に良くしてくださいます。今では、18才で上京して母の介護で戻った浪江町よりも、桑折町のことを良く知っているくらいです。

リフォームが済んだ権現堂の家は浪江駅に近いので、お盆やお彼岸に帰省する方々の交流の場にできないかと考えています。桑折と浪江を往復する生活になるかもしれませんが、これからは浪江のお役にも立ちたい。また、私の本籍地は、今では珍しい標葉町（しねはまち）なので、縁があったら郷土芸能「標葉せんだん太鼓」の保存活動も応援したいですね。

高野　一郎さん（請戸）

取材者：認定ＮＰＯ法人市民公益活動パートナーズ　古山
取材日：５月29日　「平成29年７月 広報なみえ掲載」

原発20㎞圏内は、我々の魚場。船方はやはり海にいるのが一番

震災前は、ヒラメやカレイ、小女子などの漁をされていた高野さん。現在も海の仕事をされていますが、奥様によると、震災後、日々の献立は大きく変わったそうです。獲れたての美味しい魚が毎日食べられなくなったことについて、「震災前は当たり前だったけれど、こんなに贅沢をしていたのか」と思うこともあるそうです。

来年春には浪江町の町営住宅に移られるそうで、今からご夫妻で楽しみにされていらっしゃいます。また、91才になるお母様も、少し足は弱くなったものの、とてもお元気とのことです。

▲「年を取っても、自分たちの食べる分くらいの魚は獲るよ」とおっしゃる高野さんの言葉がとても印象的でした。

◆あちこち避難をしたが、早く浜通りに戻りたかったですね

３月11日、まさに震災が起きた時刻には、相馬双葉漁業組合請戸支所の職員たちと共に、港で作業用電源の位置決めをしていました。

地震で道はガタガタでしたが、浪江町内に住む長男の嫁と孫の様子を見るために、港のすぐ前の家に戻り、母と妻を伴って避難も兼ねて向かいました。家の中は散々でしたが、皆無事で、高台にある幾世橋小学校に一緒に避難しました。午後４時ごろに浦尻の船主さんから「浦尻は全滅」という話を聞き、おそらく請戸も駄目だろうと思いました。ですから、津波は見ていないのですよ。

12日の朝、原発事故による20㎞圏内の避難指示が出て、南相馬市小高区の妻の実家に移りました。その後、30㎞圏内も避難指示となり、妻の姉の家族など４家族で飯舘村の親戚宅へ身を寄せ、15日までお世話になりました。

飯舘では携帯電話がつながらず、埼玉県本庄市に住む妹とやっと連絡がとれたものの、ガソリンがなくて困っていたところ、義弟の新潟の友人が届けてくれて、16日朝に出発できました。一般道を走ったのですが、大渋滞。首都圏の道にも不慣れだったこともあり、ようやくその日の夜12時に到着しました。

５月30日まで約２か月半、本庄市にはお世話になりましたが、その間、組合の役員として何度も福島との間を往復しました。６月からは福島市御山の借上げ住宅に１年３か月ほど住みましたが、冬はいつも空がどんよりしていて、浜の抜けるような青空が見たかったですよ。

◆魚場の片付けやサンプリング調査が、今の仕事です

平成24年10月１日に、この南相馬市原町区の借上げ住宅に移ることができました。その年、田んぼに打ち上げられて比較的損傷が少なかった船を宮城県の松島で修理し、平成25年４月から鹿島港に置いて、組合の持ち回りで行っている、福島県や東京電力の依頼による瓦礫の片付けや海水、砂、魚などのサンプリング調査に、私も２か月に１回程度携わっています。

でも、その年の７月に脊髄梗塞を患い、車椅子の生活を約１か月強いられました。左手左足にやや麻痺が残っていますが、今は仕事ができるくらい回復しています。そして、今年の２月下旬からは請戸港を拠点に活動しているんですよ。

海や魚のサンプリングをしているからよく分かりますが、第一原発の周辺３㎞～５㎞圏内も含めて、福島の魚は安全ですよ。今、11種類の出荷制限をしていますが、ネックは風評被害だけ。震災以前より魚は増えていますが、仲買をする人が大幅に減っています。平成30年度中には、浪江でも市場が再開される予定ですので、この状況が好転するように頑張りたいと思っています。

松本サチ子さん（請戸）

取材者：ＮＰＯ法人山形の公益活動を応援する会・アミル　柴田
取材日：５月27日　「平成29年７月 広報なみえ掲載」

請戸の海や魚料理を懐かしく思い出しながら、これから自分の身体や時間も大切に過ごしたいです

▲お世話になった園長　平塚堯子先生（左）と松本さん（右）。
松本さんと平塚先生は、同い年。明るく元気で活動的なお二人です。

平成24年４月号に掲載された松本サチ子さんは、息子さんと山形県山形市に暮らしています。
調理師の仕事、自宅近くの畑での野菜作り、朝のラジオ体操と、忙しくも楽しい毎日を過ごしておられます。

◆保育園調理師としての日々

調理師として約20年、双葉厚生病院に勤めたので、そのことを知った友人から「どうしても手が足りないので手伝ってほしい」と言われ、山形市にあるひらつか保育園に勤めることになりました。リウマチも患っていたし、こんな風にこの年まで仕事できるとは思わなかったですね。

調理師２名で50食分の食事を作るのですが、私は体が小さいから、鍋が大きくガス台も高くて大変！背伸びして調理しています。やっぱり魚を煮るのは、浪江の時から慣れているので得意ですが、卵や小麦、乳製品などのアレルギーを持っている子もいるので、注意して調理しています。子供たちに「どうだった？」と聞くと「先生！美味しかったよ！」と言ってくれたり、嫌いな物があった子が「食べ終わったよ！」と報告してくれたり。１歳、２歳児の園児は、自分でぽろぽろこぼしながらも本当に頑張って食べてくれるし、大変なところもあるけど、にこにこした笑顔を見ると私も嬉しくなります。

◆これからの愉しみ

山形県で復興支援員をしていた方が２か月に１回開催している「山形浪江コスモス会」にも参加しています。15名くらい集まり、皆町のことが分かっている町民同士なのでいろんな事を話すことができるし、一品持ち寄りで気兼ねなく楽しい時間ですね。

また、友人３人で畑を借りて野菜作りをしており、これからの季節は収穫が楽しみ。なすやきゅうり、玉ねぎ、にんにく、らっきょうが獲れます。肥料や虫よけにもみ殻を燃やしたものや燻炭を使い、工夫して育てており、土を触ってストレス解消にもなります。仕事をしていると忙しく家や畑、身体のことまで手が回らないので、５月末で一旦仕事をお休みし、これからは自分の時間も大切にしたいと思っているところです。ほかにも、平清水焼を体験する交流会や、夏に埼玉から孫が遊びに来ることなど、これから楽しみな予定もあります。

◆思い出す請戸の海や魚料理

町に戻ることを考えると、若い人の働き口はあるのか、町がお年寄りばかりになってしまうのではと、戻るのには不安が残っています。原発がなければ近くに家を建て、請戸の海も眺めていられたかもしれないですね。自宅の目の前が海でしたから、「もってけ！」と知り合いの漁師さんからよく魚をいただいていました。懐かしく思います。早く放射能の影響がなくなり、請戸にまた魚が揚がるといいなと思っています。

山形でお友達もでき、毎朝一緒にラジオ体操や温泉に行ったり、保育園でも園長先生はじめ、先生方に仲良くしてもらい植木やお花をもらったりして、いい方ばかりです。こちらにもお友達がいっぱいいるので、できれば山形で早く落ち着く家を見つけたいと今は思っています。

古山　優太さん（南津島）

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ　古山・松田
取材日：５月27日　「平成29年８月 広報なみえ掲載」

あれからほとんど休むことなく、再建を目指して

いわき市三和。南側が開けた丘陵地の山林に、親戚一同の力を借り４年をかけて整備してきた牛舎と、三世代の家族９人が住む家で新たな生活が始まったのが今年の２月。

今は、自前で飼う繁殖牛と子牛120頭を、以前の規模の300頭に戻し、さらに牧場を広げることを目標にしているとのことです。また今年９月、和牛のオリンピックとも言われる「第11回全国和牛能力共進会　宮城大会」が仙台市で開かれるため、来月末に行われる福島県の予選会に向けた準備を進めていらっしゃるそうで、古山さん親子の奮闘は、まだまだ続きそうです。

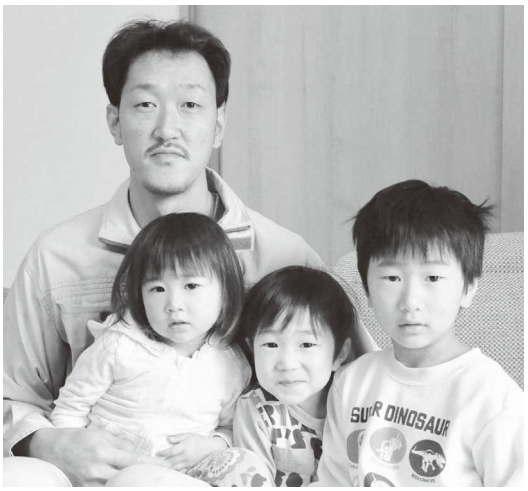
◆父は津島、私は南相馬で牧場を営んでいました

震災の年の１月１日に長男が生まれ、妻と息子が３月３日に南相馬市原町区大原の自宅に戻ってからまもなくの災害でした。地震発生後、祖父母と両親が住む実家の様子が気になり、私一人で午後７時頃に34号線を辿って津島に向いました。原浪トンネルを抜けて１１４号がひどく渋滞していて、変だと思いましたね。翌朝、父は飼っていた牛たちに３日分の餌を与えて、東和体育館に避難しました。

私たち家族は自宅に待機して避難指示を待ち、３月15日から同じ東和体育館に３日間避難することになりました。牛と共にいなかったのはその間だけで、その後は毎日、東和と原町を朝夕往復しながら、世話をする生活が続きました。妻と息子は、大原の自宅から、妻の姉が嫁いだ会津地方に避難し、５月までお世話になりました。

一方、祖父母は二本松市の二次避難所から仮設住宅に入居。父は県に頼んで牧場を探してもらい、６月に津島からいわき市遠野に移るため、３００頭近くの牛を移動させました。牛のスクリーニングも大変でしたが、移送がまた大変。トラックには15頭しか乗せられず、その上、牧場への道がとても狭かったため、２tトラックに数頭ずつ移し替えて運びました。父は最悪だったと話していましたよ。

私たち家族は８月に相馬市大野台の仮設住宅に移りましたが、さらに大原の牧場に通いながら、２５０頭の牛の世話を続けました。思えば、１日も休まずに今日までやってきました。



▲右から、長男の璃久君６才、次男の水樹君４才、長女の沙優ちゃん２才に囲まれた優太さん

◆２０１２年春、親子で牧場を再開。今年からは家族全員一緒です

父が営む遠野の牧場には、預託された牛も含めて１，０００頭ほどに増えていましたので、私も一緒に牧場を続けることになり、同じ町内に親世帯と子世帯、家を２軒借りました。ところが、大雪の年に牛舎が大破してしまい、いわき市勿来に牧場を移して２０１６年３月まで営業を続けました。

牧場は地元の人たちの承諾が必要ですので、新たな土地探しは苦労しましたが、やっと見つかりました。私もいずれは津島に戻るつもりでしたが、10代で家を離れてから、久しぶりの三世代同居になります。そして、震災の年に生まれた長男は小学１年生になりました。

ふるさとの津島をどうしたいなどと考えることは、今はできません。ただ、大切な友人たちと過ごしたふるさとです。また、いつもの場所に戻りたいですね。以前のようにはなかなか会えませんが、離れていても私は平気です。心友ですから…。

「いつまでいわき市に」と聞かれることもありますが、戻っても当分は住めないでしょうし、牧草のことや牛肉の出荷制限もあるでしょう。ひとの口に入るものを育てることは、かなり難しいはずです。ですから、今はここでやっていきますよ。

髙倉　孝二さん・幸子さん（権現堂）

取材者：ＮＰＯ法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ　鍋嶋
取材日：６月８日　「平成29年８月 広報なみえ掲載」

孫を迎え入れることができる家に住みたい

▲畑の前で笑顔の髙倉さんご夫婦

震災当時、長男夫婦、お孫さんと一緒に暮らしていた髙倉さんご夫婦。長女、次女家族と津島小学校、あずま運動公園（福島市）を経て千葉県柏市に避難、今はＮＴＴ社宅で暮らしています。被災者用に提供されたＮＴＴ社宅には、震災直後には多くの人たちが暮らしていましたが、相次いで転居。今は一棟に数家族が暮らすという状況です。

◆家族はばらばらに

震災後、私たち夫婦と長女、次女家族、甥っ子の11人で避難した。柏市の叔母さんに、空き家になっていた家を提供してもらったけれど、３か月ほどで出ざるを得なくなり、慌てて市役所に通い、ここを紹介してもらった。次女は震災直後に、いわきの病院で出産、生後10日の孫と一緒にこの社宅に来た。不自由な思いをさせてしまった。浪江の家だったらと思ってしまう。その後、長女夫婦は柏の葉にマンションを買った。次女夫婦は、夫の転勤先で行った秋田で暮らしている。今は、夫婦二人での暮らし。娘たちの家を訪ねて、孫たちの顔を見るのが何よりの楽しみになっている。でも、もし震災がなかったら、浪江の家で私たち夫婦が、子どもたち、孫たちを迎え入れることができたのにと思う。

◆診断書を書いてもらえない

震災後、ストレスで眠れなくなったのに合わせて不整脈の症状が悪化し、いくつかの病院を受診した。東京電力の賠償手続をするためには、原発事故由来であるという診断書が必要なのだけれど、最初にかかった病院では書いてもらえなかった。「どうして書いてくれないのか」と尋ねたら、「ストレスは誰にもある、自分にだってある。この病院では、原発事故に関係のない病気には診断書は書けない」と言われ、説明を求めに行ったら、事務職員と事務長に抱きかかえられて外に放り出された。原発事故によって変えられた暮らしと通常の暮らしを同じ尺度ではかるとは。悔しかったね。

震災前のかかりつけ医にも相談したが、「しばらく診ていないから診断書は書けない」と言われた。二本松まで通院するわけにもいかない。その後、紹介された東葛病院付属診療所で胃がんの検査を受けたら、脳梗塞を起こす寸前だと言われ、即入院になった。そんなに悪い状態とは思ってもみなかった。これで人生終わりと思い、家族全員を集めた。手術をしてから１年余り、今も不整脈と、うつ症状で通院している。

◆野菜作りとパークゴルフが楽しみ

ここに来てしばらくしてから野菜作りを始めた。もともと畑ではなかったが、スコップ一本で掘り起こし、落ち葉でたい肥を作り、３年目からやっと野菜が作れるようになった。できた野菜は周辺の人たちに配ったが、「放射能がこわい」と受け取ってもらえないこともあった。そこで、市役所に放射線量の計測を依頼、畑は大丈夫だったが、集合住宅の雨どい周辺、角地１㎡前後５か所は立ち入り禁止区域になった。

畑の作業がなかったら、本当に味気ない生活だったと思う。もう一つの楽しみがパークゴルフ。震災前からの仲間が週に１回は集まって楽しんでいる。茨城や岩手、遠距離でも苦にならない。パークゴルフをやっている時は、悔しかったこと、哀しかったことを忘れられる。

▲立ち入り禁止！

◆新しい住まい

いわき市の復興公営住宅と今の住まいを行き来していたが、来年３月には完全に引っ越す予定でいる。新築一戸建てだから暮らしやすくなると思うが、引っ越し準備に時間をかけているうちに床下の湿気が部屋にこもり、ステンレスの家具が錆びたり、臭いがしたりで少し困っている。

浪江の避難指示が３月31日に解除になったが、全域解除でなかったのが残念。同時解除を訴えてきたのではなかったか。山林の除染もして、皆が帰れるようにしてほしい。住む人間の数が多くならないとイノシシの町になってしまうのではないか。ただ、今の状況では、浪江の家に孫たちを迎え入れるのは難しい。今は帰れなくとも、いつかは帰りたいなぁ。

田辺　美保さん（棚塩）

取材者：（特活）くびき野ＮＰＯサポートセンター　新保
取材日：６月９日　「平成29年８月 広報なみえ掲載」

将来の夢に向かって自立を

現在、新潟県新潟市で学生生活を送っている田辺美保さん。
田辺さんの通っている専門学校で、学校生活や将来のこと、休日の楽しみ、最後には浪江町への想いについて伺いました。

▲「自転車で古本屋めぐりをするのが楽しいです」と笑顔をみせる田辺さん

◆システムエンジニアを目指して

私は、新潟市のコンピューター関係を学ぶ４年制の専門学校へ通っていて、今年２年生になりました。学校では、Ｗｅｂページを製作したり、自分で課題を決めてシステムの製作などに取り組んでいます。

昨年、進学をきっかけに同じ新潟県内の三条市に住む家族のもとを離れ、一人暮らしを始めました。新生活も少しずつ慣れてきましたが、学校生活とアルバイトの両立は大変です。休日は、趣味の読書や自転車で古本屋めぐりを楽しんでいます。特にミステリー小説を読むのが好きで、古本屋で絶版の本を探したりするのがワクワクしますね。

将来は、システムエンジニアなどコンピューター関係の仕事に就くのが夢です。福島県内にそのような就職先があればとも思いますが、今はまだ「場所」を決めていません。両親からは「18歳を過ぎたら、自分のことは自分で考えて自立しなさい」と言われているので、自分の将来についてこれからゆっくり考えていきたいです。

◆震災は誰のせいでもない

震災があったのは、私が中学１年生で卒業式の日でした。父が漁師をしていたため、地震発生時すぐに津波の危険性を教えられ高い所へ避難しました。その後、学校や親戚の家などで避難生活を送り、バスでたまたま新潟県三条市へ。三条市内の体育館で２～３か月過ごし、そのまま同じ市内の借家に移りました。

始めは、新潟の気候や生活環境など慣れないことも多かったです。特に戸惑ったのが「ごめんください」という言葉。新潟では、近所のお宅に訪問する時やスーパーなどで知っている人に会うと「こんにちは」の代わりに「ごめんください」を使うことが多いんです。

あの日以来、地震や津波による甚大な被害、原発の問題などがありますが、震災は誰のせいでもないと思っています。沿岸部ではこんなに被害が大きくなると思わず油断していた人たちも多かったと思います。

今までも私は何度か浪江町へ一時帰宅していますが、高校生の妹と中学生の弟は震災当時二人とも幼かったため、浪江町で過ごした記憶はほとんどないようです。私自身は、時間ができたらまた帰りたいなと思っています。

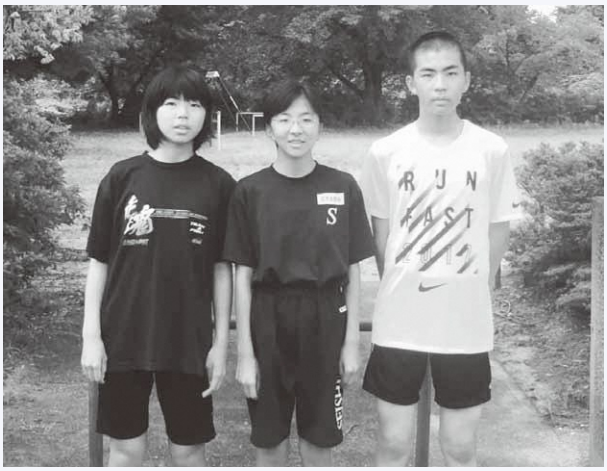
震災で離ればなれになってしまった友人たちとはほとんど連絡を取れていないので、来年の成人式で会えたら嬉しいです。

福島西高校２年 石井あかねさん（棚塩）

今回、平成23年12月号で取材させていただいた石井さんから、取材以降の気持ちの変化や近況をお知らせいただきました。 「平成29年９月 広報なみえ掲載」

将来は「人を助ける仕事」に就きたい。そして、これまで支えてくれた人への恩返しをしていきたい。

I love 浪江



▲私は陸上部で、妹・弟も中学校の特設駅伝部で頑張っています。
左から、あかねさん、あゆみさん（妹）、京輔さん（弟）

私が前回、こころ通信に掲載された小学５年生の頃は、まだ震災の爪痕が大きく残っている時期でした。避難場所でうまくやっていけるのか不安な気持ちで一杯でしたが、少しずつ新しい生活に慣れていき、不安な気持ちも少なくなり、普通に生活を送れるようになっていきました。その時は、将来なりたい職業として、「人を助ける仕事」と答えており、今でもそのことは変わっていません。

その後、私は中学生になり、部活動はソフトボール部に入部しました。幾世橋小学校４年生の時にソフトボールを経験し、とても楽しかった思い出がたくさんあったので、またソフトボールをすることができ、とてもうれしかったです。中学２年生になってからは、特設陸上部と駅伝部にも入り、練習はとても大変でしたが、より充実した中学校生活を送ることができました。

高校は、福島西高校に進学しました。部活動は、陸上部に入りました。走りにより磨きがかかるように日々努力しています。私の高校での目標は、勉強と部活動の両立です。理由は、将来の夢に少しでも近づけるよう大学に進学したいと思っていることと、そして、充実した高校生活を送れるように部活動も頑張りたいからです。

震災から２０１７年で６年が経ち、震災直後の状況とは随分変わり、新しい生活場所である福島市でも環境に慣れ、震災前とほとんど変わらない日常生活を送っていますが、浪江町の友達とはなかなか会うことができず、寂しい気持ちもあります。しかし、これから先、成人式などで友達に会う機会があると思うので、その時まで楽しみはとっておきたいと思います。

震災によって変わってしまったことがたくさんありましたが、もう一度自分を見つめ直し、いろいろな可能性に挑戦していきたいと思います。そして、もう少し年月が経ち、浪江に完全に戻れるようになったら、今まで自分を支えてくださった人たちに少しでも恩返しができるように頑張りたいと思います。それまでは、家族と協力して今の生活を大切にし、喜びや悲しみを共有できるようにしたいと思います。

最後に、今までいろいろな面で支えてくださいました皆さま、ありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

▲たまに時間が合えば３人で走っています。

本田　菜々さん（権現堂）

取材者：ＮＰＯ法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：７月16日　「平成29年９月 広報なみえ掲載」

夢は東北の高校に女子野球部を創設すること

▲自宅前で、お父さんと菜々さん

小学校6年生の時から硬式野球を始めた菜々さん。
女子硬式野球の強豪校への進学を機に、家族で埼玉県加須市に転居しました。
自分のがんばりが浪江町の人たちの元気につながればと練習に励む日々です。

▲ユニフォーム姿の菜々さん

◆「マドンナジャパン」が憧れ

私は今、埼玉県加須市にある平成国際大学スポーツ健康学部で学びながら硬式野球部に所属し、毎日練習に励んでいます。平成国際大学の女子野球チームは、全国で1、2位を争う強豪校で部員は41人。今は、ＤＨ（指名打者）で試合に出ていますが、ポジションは、センターです。現在、女子硬式野球は、中学、高校、大学のチームや企業のクラブチームが関東と関西地域を中心に30数チームあり、年間を通して様々な大会が開催されています。全国の選手から選抜された「マドンナジャパン」は、女子野球ワールドカップを5連覇、世界ナンバー1の力を持っています。大学の先輩には日本代表「マドンナジャパン」として活躍する選手もいて、私の憧れです。

◆父や母の応援に支えられ

我が家は、父は町の代表として市町村対抗野球に出場、3年前には、「オールいわきクラブ」のメンバーとして西武ドームでプレーしました。格好良かったです。兄や姉も小・中・高校時代には、野球部、ソフトボール部に所属していた野球一家です。

震災の時、私は小学校を卒業したばかりで、硬式野球を始めた頃でした。震災で、所属していた相双中央シニアのメンバーは避難でばらばらになり、私は福島シニアに入部しました。メンバーは40人、女子は私一人でした。野球が好きでしたから、男子ばかりの中にいても苦になりませんでした。

震災前から、高校は野球の強豪校に進学しようと決めていました。震災後、希望どおり花咲徳栄高校に入学することができ、家族そろって、埼玉に転居しました。父母と姉の4人暮らしですが、父は職場が福島なので、ウイークデーは職場近くの会社の社宅に居て、週末になると埼玉の家に帰ってくるという生活です。家族の理解と応援があるので、自分の好きな道に進むことができていると思います。

◆夢は女子野球部の創設

大学に自転車で通学、月曜日以外は4コマの授業の後、3～4時間野球の練習をするという毎日です。大学に女子野球部の専用グラウンドはなく、男子野球部と調整したり、近くの施設のグラウンドを借りて練習をしています。練習は厳しいですが、高校時代の練習のほうが、もっとしんどかったです。好きなことを続けているので、苦労はないです。大学に入って、1年生でも試合に出られてうれしかったです。忙しい中でも、父も母も試合を見に来てくれます。ありがたいです。

私の夢は、日本代表「マドンナジャパン」です。将来は、女子プロ野球を経験してから、教員になりたいと思っています。東北の高校には、女子野球部がありません。私は、家族の理解があって、野球を続けることができていますが、ほとんどの人が途中で諦めていると思います。だから私は、東北の高校に女子野球部を創設できたらと思います。

小学校の時には、おじいちゃんとよく浪江の海に「アジ釣り」に出かけたのを覚えています。女子野球で頑張って、浪江の人たちに元気を送ることができたらと思います。応援してください。

本田菜々さんプロフィール

- 小学校4年生～6年生　苅野ジャガーズ所属
- 中学校1年生～3年生　相双中央シニア、福島シニア、女子プロ野球ユースチーム（ピュアエンジェル）所属
- 高校　花咲徳栄高校
- 大学　平成国際大学

元気つく場会（いい仲間つく浪会）

代表 古場　泉さん・容史子さんご夫妻（幾世橋）
大友皓示さん・静子さんご夫妻（大堀）
門馬久敏さん・信子さんご夫妻（請戸）
三浦秀一さん・和加子さんご夫妻（権現堂）
澤田俊子さん（加倉）・伊藤幸治さん（川添）

取材者：茨城ＮＰＯセンター・コモンズ　菊池 ／ 浪江町復興支援員茨城県駐在　中嶋
取材日：７月22日　「平成29年10月 広報なみえ掲載」

帰りたいけど帰れない…。気持ちが沈みがちになるけれど…そんなときには、「元気つく場」にみんなで集い、お互いに元気を分かち合っています。

▲左から、門馬信子さん・三浦和加子さん・澤田俊子さん・門馬久敏さん・大友静子さん・大友皓示さん・三浦秀一さん・伊藤幸治さん・古場泉さん・古場容史子さん

2012年６月に古場さんご夫妻が立ち上げた元気つく場会（いい仲間つく浪会）も今年で６年目に入っています。毎月定期的に開催している茶話会をメインとして、コンサート、収穫祭、バスツアーなども計画して浪江町民はもちろんのこと、双葉町や富岡町など様々な町の人たちが集まり交流を深めています。

今日（取材日）の交流会では、午前中に生でも食べられるトウモロコシの収穫祭、午後の茶話会では浪江弁で楽しくお話し、最後はみんなで「相馬盆歌」や「炭坑節」を踊って充実した楽しい１日を締めくくりました。

交流会終了後に浪江町民の方々に残っていただき、インタビューさせていただきました。

◆会の立上げ

古場さん　２～３か月ごとに、つくば市役所で開催されていた避難者サロンでは、多くの避難者が説明を聞きに来ていましたが、知らない人ばかりなので、説明が終わると潮が引くように皆さんが帰ってしまい、何か寂しい気持ちになりました。

そのような思いは、交流サロンに参加したほかの避難者の皆さんも同様だったようで、「お茶でも飲みながら、お話できる場を作ってもらえないか」との声も聞こえてきましたが、どこに誰が住んでいるかも分からない状況では、「無理です…」とお断りするしかありませんでした。

それでも、何度か背中を押されていくうちに『何か方策はないか』と考え始めていた頃、地元のスーパーが募集していた社会貢献事業の存在を知り、しゃべり場立上げのきっかけづくりになるのではないかと思い、浪江町出身の民謡歌手「原田直之さん」をお招きしての交流会『元気つく場で おしゃべりしましょ!!～つくば市・浪江町避難者の集い～』を企画し応募することにしました。

結果は残念ながら不採用でしたが、計画段階で、原田直之さんとのつながりを持つことができたことが大きなチャンスとなり、それならば自力で開催しようと決心しました。

イベントの自力開催を遂行するには、一定の組織が必要と考え、現在の『元気つく場会（いい仲間つく浪会）』の立上げにつながっていきました。

◆会の運営

古場さん　会員登録者数は約１００名です。ピークの時期より減ったものの、会の創設当初よりは増えています。

会報を毎月50世帯以上に送付し、そのうち活動に参加されるのは、その時々で差はあるものの30名程度です。参加者はいつも来られる方が多いのですが、新たにつくば市に移転してきて口コミで参加される方も増えています。

交流会は毎月１回開催し、10時から15時まで茶話会とイベントを開催していますが、筑波大学生の音楽演奏、市民サークル的なパフォーマンスや体操教室などその時々に多彩な「お楽しみ会」を加え、マンネリ化しないよう工夫をしています。最近では、よりつくばを知ってもらうために、つくば市内の農園を回って『ミニ収穫祭』を企画することも多くなってきました。

今日は『トウモロコシの収穫祭』、先月は『ブルーベリー収穫祭』と、大変好評でした。

毎月の活動はつくば市周辺で実施していますが、一年に一度は、補助金等を活用して、福島県内へのバスツアーを企画し、

『十日市祭』見学や交流会などを楽しんでいます。これからもみんなで集まって楽しく過ごし、元気を分かち合える会であり続けることを願っています。

▼茶話会の様子

▼盆踊りの様子

◆元気つく場会に参加して

大友さん 市役所主催の交流サロンで、古場さんがつくばでこの会を立ち上げるので参加してほしいとの誘いがあった。当時は右も左も分からない状況だったし、地元の人と話す時は福島から避難してきていることを話すのが辛かったので、町民の人達が集まる場で、浪江弁で気楽に話せることが楽しみで発足当時から毎月参加している。

門馬さん つくば市役所に集まったのがきっかけで、この会に参加するようになった。避難してきた当時は無我夢中で過ごして、いろいろ考える余裕がなかった。年数が経っても、何がなくてもストレスは溜まる一方で、この気持ちは当事者にしか解らないと思う。

三浦さん やっぱり市役所からの話と、大友さんにこういう会があるから参加しないかと誘われて、最初はどうしようかと迷ったが、車に乗せて行くからというのが最初で、それからずっと参加していて、今では兄弟以上の付き合いになって来ている。

澤田さん 私は皆さんより3年～4年遅れて参加するようになったが、浪江町で懇意にしていた方が「大友さんという人がつくばに行っているから、その人を頼って行きなさい」と言われたのがきっかけで参加するようになった。こっちに来た当時は、家にこもりきりで、ぼーっとしてばかりで変なこと、最悪のことばかり考えていたが、この会に参加するようになって、そういった考えから抜け出すことができた。

古場さん 避難当初からしゃべり場の開催に至るまでの1年余り、家族以外の人と会話する機会がほとんどない状態でしたが、会を立ち上げてからは、皆さんのおかげで元気をいっぱいいただいています。

◆会の今後について

伊藤さん 会も7年になるが、先程のように交流会の最後に盆踊りを楽しんだりして、雰囲気が素晴らしいし自慢できるので、ぜひPRしてほしい。補助金も町や県に申請しているが、いつまで貰えるのか不安もある。

古場さん 最近、「補助金がなくなったら、会の運営をどうするのか…」と皆さんと話し合ったことがあるが、「参加費を自己負担しても良いので、会の活動を続けてほしい」という声も多く、その状況に至った時点で、何かしら会を維持できる方法を見つけて存続させていこうと考えているところです。

◆浪江町には帰りたいと思いますか

門馬さん 帰りたい気持ちはあるけれど。帰れない。帰ってもどうしていいか分からない。家もない、これから建てることもできないので、このつくばに住むしかない。

大友さん 帰りたいと思っても、もう年齢的にも高齢だし、家のことができなくなってしまう不安もある。6月に一時帰宅した時に、小高に帰還した兄弟の家に寄って様子を見た時に、きれいになっているのを見て、自分の自宅は大堀地区で、除染も終わっていないため木や草が生い茂っている状態なので、こういう生活はもうできないのかと思うと心にぐっと来た。

澤田さん 私も帰りたいけど、この間自宅を解体したので帰る家もないので、このつくばに住むしかない。

◆最後に

古場さん この会に参加されている方たちは、お互いに元気を分かち合っており、これからも、元気つく場で、いい仲間たちと楽しく交流していきたいと願っています。つくば市や周辺の市町村に避難していて、交流の機会を希望される方がいらっしゃいましたら、ぜひご連絡ください。

私たちはいつでもお待ちしております。

連絡先電話番号

TEL 090(7076)2374（古場 泉）

TEL 090(7790)9574（古場容史子）

舛田　玲香さん（棚塩）

取材者：浪江町役場　佐々木・鴫原
取材日：９月５日　「平成29年10月 広報なみえ掲載」

“笑顔になれる作品であること”浪江から世界へ

▲舛田さんと“Fly ME to The Moon羊羹ファンタジア”パッケージ原画

会津若松市老舗和菓子店の新商品パッケージに作品を描きおろし、浪江出身の日本画家として注目を集めている舛田さん。子どもの頃、海を眺めながら想像した異国の動植物を、海外で実際のものとして見たことが舛田さんの作品のテーマになりました。鮮やかで愛らしく力強い作品は、その感動から生まれています。“楽しい気持ちで描いたものを見た人が楽しい気持ちになってくれれば”というぶれない強い思いが、福島から世界へとつながる未来を照らしてくれるようです。

海が近い家で育った私は子どもの頃から海を眺めて、その向こうの日本と違う世界を想像して憧れていました。こんな生き物がいたらいいなと、空想画をよく描いており、成長とともに本格的に絵を勉強したくなっていきました。

日本画を学ぼうと決めた理由は、その独特な画材に興味を持ったからです。天然の石を砕いた絵の具や金箔などを使って描く日本画は、作品がキラキラと輝きを放っており、その美しさと伝統技法の数々に惚れ込んでしまいました。

大学で描いた作品の多くは実家にありました。卒業間際の震災。実家は津波に遭い、作品は失ってしまいました。友人を頼り、しばらく札幌に避難しました。避難先では、作品制作からは離れていたものの、絵をやっていることを職場で話したことから、医療関係のポスターやイラスト、論文の挿絵を頼まれて描いていました。

海外に初めて行ったのは２０１３年の11月。きっかけは、パプアニューギニアで友人が立ち上げた英語の本を寄附するプロジェクトにボランティアとして参加したことです。震災をきっかけに絵を続けることに迷いがあったのですが、生きている自分は本当にやりたいことに挑戦するべき。そのためには、描きたいものを現地で実際に目にしておかないと自分が満足したものが生み出せないのではという想いがあり、思いきって渡航しました。初めての異国の地なのに、どこか懐かしい気持ちで小さい頃の自分に戻れた、やっとここに来られたという思いに駆られました。幼い頃から海を見て想像していた、個性豊かな動植物が鮮やかに暮らす美しい世界が、目の前に現実として広がっていたのです。

その後、オーストラリアを旅してから帰国し、半年後の２０１４年の春、ワーキングホリデーでシドニーへ。自己の制作活動のほかにデッサン指導をしたり、在豪日本人主催の震災復興支援イベントでは作品展示をしました。大自然の中で、すぐそこに虹色のインコがいたり、野生コアラがいたりと、まるで動物園に住んでいるような素晴らしい環境でした。

一つひとつ進んでいくうちに、出会いによって思いが人に伝わりつながり、日本画を通して伝えたいことが広く発信されるようになってきました。

心の扉を全て開け放って描く作品を見てもらうことは、心そのままを見てもらうことと同じで、いつも勇気をもって展示しています。

〝美しいものは笑顔にさせる、癒す力がある〟絵を見た方から頂いた言葉が胸に沁みわたりました。

浪江という豊かな自然環境で育ったからこそ、綺麗な絵を描けるようになった。国境のない理想郷を表現した作品で、国内外で活動していきたいです。そこで福島の良さも伝えていけたらと思っています。

〝楽しい気持ちで描いた絵は、見た人を楽しい気持ちにさせてくれる〟そう信じて、これからも進んでいきます。

▲小学生の頃の帰り道を描いた“かえりみち、東の空”（2015公募ふるさとの風景in喜多方 入選）

志賀　利明さん・絹子さん（北幾世橋）

取材者：特定非営利活動法人寺子屋方丈舎　江川
取材日：９月10日　「平成29年11月 広報なみえ掲載」

こころ落ち着く毎日

▲浪江のご自宅で

夫婦でからだをいたわりながら、浪江町内の自分の家で暮らす毎日。
震災前の暮らしが少しずつ戻ってきました。

◆持病を抱えながらの避難

利明さんは、震災前は重機のオペレーターとして、仕事をしてきました。利明さんは持病を抱えながらも働き、妻絹子さんも共に働いての生活を送っていました。震災の日、利明さんは通院の日でした。診察を終え、ちょうど家に戻って休んでいる時に大きな揺れがありました。津波が気になり海の方に向かったりしながらも、絹子さんが仕事先から戻るのを心待ちにされていたそうです。絹子さんは、大渋滞の道路を遠回りして帰宅、家族の無事を確認し、その夜は停電している中で食事をとりました。

利明さんは透析治療を受けるために町内の病院に連絡を入れ、最後に通院をしたのが３月14日。車の燃料もなく不安な中で、知人からガソリンを分けてもらい、何とか通院できる病院を探すために山を越え、福島市内の病院に避難することができました。運よく借りられた一戸建ての住宅では、親戚も含め最大８人が１か月あまり暮らしたそうです。今でも、週３日は福島の病院に通っているため、その家を借りているとお話にありました。

2016年（平成28年）11月2日（水曜日）　（24）

浪江 準備宿泊始まる

町民 自宅に長期滞在

近づく避難解除「実感湧く」

東京電力福島第一原発事故で全町避難している浪江町の避難指示解除準備、居住制限区域で二日、避難指示解除まで長期滞在できる準備宿泊が始まった。町民は気兼ねなく自宅で寝泊まりできる喜びをかみしめた。

町によると準備宿泊（そで、絹子さんら夫婦の対象は十月二十日時点で七千八百五十五世帯（二万二千八十五人）。三千二百世帯（二百八十一人）が登録した。

「自宅はのんびりできるね。安心感がある。解除が近いと実感湧く」。初日から準備宿泊を始めた同町北幾世橋の志賀利明さん（八一）。生活環境には

自宅でくつろぐ志賀さん夫婦

▲平成28年11月に準備宿泊が可能になった時、福島民報に掲載された記事を見せていただきました。
（福島民報 2016年11月２日掲載）

◆二人で支え合いながら

昨年11月の準備宿泊が始まった時に、浪江に戻ったのですが、浪江の家は、長い避難生活の中で修理が必要になっていました。ボイラーの故障など、少しずつ修理して、住めるようにしてきました。今では、戻ってきてもまだ家の修理が必要なご近所の方に、お互いさまの気持ちでお風呂を使ってもらっています。

利明さんのお父さんは戦争中、軍属として船に乗り兵士の移送を行っていましたが、利明さんとお母さんを残して帰らぬ人になられたそうです。お二人の出会いは、同じ会社に勤めていたのがきっかけで、間を取り持つ人がいて結婚されました。共に働きながら、二人の子どもにも恵まれて、ひたすら働きました。

「震災後も、肺炎から心臓を悪くしたり、軽い脳梗塞がおきたり大変だった」と語る利明さん。今は、福島市までの通院の運転では、絹子さんがハンドルを握ります。通院、買い物に必要な車ですが、長時間の運転は、大変な時もあります。できれば、「浪江の町に買い物ができるところがあれば便利だよね」というのがお二人の期待です。

◆暮らしを取り戻す

現在、息子さん二人は郡山市に住んでいます。時々行き来をしながらお互いの生活を取り戻しています。家の周りには、イノシシやアライグマ、ハクビシンも現れるので、「（獣害対策の）電気柵は欠かせない」と言います。

時間の流れの中で少しずつ、自分たちの体にも変化が起きてきています。「それでも、自分の家はなんとなく落ち着く」といいます。「安心」を手に入れることができたことが、幸せというお二人でした。

菅野美勇士さん・智子さん（西台）

取材者：地域社会デザイン・ラボ　中島
取材日：９月24日　「平成29年11月 広報なみえ掲載」

支援者のご厚意で箱根旅行を楽しみました！

▲菅野さんご夫妻と、雄斗君、暖人君、栞里ちゃん

美勇士さんは双葉町、奥様の智子さんは浪江町生まれ。高校の先輩・後輩に当たり、ご結婚後は浪江町西台地区で暮らしていました。現在は長男の雄斗君（８歳）、次男の暖人君（５歳）、栞里ちゃん（２歳）とご家族５人、いわき市内の復興公営住宅で元気にお過ごしです。今年４月には箱根湯本温泉組合の招待で箱根への１泊２日旅行を楽しまれました。

◆地域にだんだん馴染んできた

美勇士さん　震災後は親戚のいる長野県に避難しました。それから3か月ほど猪苗代のペンションにお世話になった後、僕の仕事の都合で千葉県、茨城県に移転し、４年前にいわき市に来たんです。

智子さん　その時はいわきに避難した方が多かったので貸し物件が見つからず、大変でした。今住んでいる復興住宅に入れたのは約1年前です。ママ友もできたし、何年も経てば第二の故郷になるのかもしれませんが、まだ落ち着かない感じですね。

美勇士さん　でも、長男が小学校に入学して地域の子ども会に入ってからは、地域の人と一緒に活動する機会も増えました。こないだは諏訪神社のお祭りで神輿を担いだんですよ。この地域にだんだん馴染んできています。

◆家族で楽しんだ箱根旅行

美勇士さん　いわきに来てからは家族で温泉に行ったり、漁師体験のイベントに参加したり、家族で過ごす時間を大切にしています。一番の思い出は箱根旅行ですね。被災地支援で箱根町から浪江町役場に派遣された方がすごく良い方で、その方のつながりで、箱根湯本温泉組合が毎年1、2組、浪江に住所登録のある人を箱根に招いてくれているんです。今年は運よく抽選に当たったので、家族５人で箱根に行ってきました。

智子さん　ホテルに1泊し、翌日は大涌谷や美術館に案内していただいたんです。箱根も一時は火山が噴火して風評被害に遭いましたが、私たちが行った時はすごく賑わっていました。温泉もよかったしホテルのお料理も美味しくて。温泉組合の方の娘さんも手伝いに来てくれて、子どもの相手をしてくれたのもありがたかったです。

美勇士さん　僕は以前、長距離走をやっていたので、箱根駅伝の名所に案内してもらえたのが一番嬉しかったです。テレビで中継する箱根駅伝の道を生で見られて感動しました。

◆浪江への想い

美勇士さん　僕は双葉出身なんです。浪江もそうですが、双葉は海が本当にきれいで、仲間とよくキャンプを楽しんでいました。また昔みたいに戻れたらいいなと思いますね。

智子さん　私は、浪江で一番思い出深いのはやっぱり十日市。あの賑わいが懐かしいです。

美勇士さん・智子さん　将来、どこに家を持つかは決めかねています。浪江に戻りたい気持ちはあるけれど、うちは子どもが小さいのでやはり線量が気になって。山の方も除染してもらい、安心して暮らせるような浪江になればと願っています。

▲箱根の名所「玉簾の滝」の前で、支援してくれた箱根の皆さんとともに

佐藤　美峰さん（川添）

取材者：ＮＰＯ法人まちなか研究所わくわく　宮道・下地
取材日：９月27日　「平成29年11月 広報なみえ掲載」

子どもたちとの生活を大切にしたい

震災後、１か月ほど徳島県で過ごし、その後平成23年５月に沖縄に移り、現在は沖縄県北谷町で生活されている佐藤さん。
４歳と10歳のお子さんと一緒に過ごす沖縄での生活についてお話を伺いました。

▲美峰さんとお子さんの壱天（いってん）君（左）と怜（れい）ちゃん（右）

◆子どもたちが環境にすぐに馴染めて良かった

沖縄に来てすぐに子どもを保育園に通わせることができました。ほかの子と遊べる環境が欲しかったので入園できて良かったです。沖縄の子どもたちはすごく懐っこいので、うちの子はすぐに馴染むことができました。北谷町は、外国の方が多く住むまちです。保育園にも外国の子どもたちがいるので、子どものほうが私より英語を理解しているはず。英語に触れる環境があることは、子どものためになるので、この環境はすごく気に入っています。

◆タヒチアンダンスとの出会い

沖縄に来た頃、私は友達もいなくて、家に引きこもりがちで、家族としか会話がない状況でした。このままでは自分はダメになってしまうと思っていた時、イベントで初めてタヒチアンダンスを見ました。偶然、自宅近くにダンスのスタジオがあると聞き、スタジオに通い始めました。ホテルでのショーやビーチでのイベント等にも出演させてもらえるようになり、最近は、子どもも一緒に踊っています。タヒチアンダンスは、私にとってストレス発散になっています。ダンスを通して友達も増え、沖縄の暮らしや文化をたくさん経験させてもらっています。タヒチアンダンスとの出会いは沖縄での生活を続けていく中で大きな出来事でした。

▲タヒチアンダンスを踊る美峰さん

◆親戚に会いたいときすぐに会いに行けた浪江町での暮らし

浪江町で暮らしていたときの環境は、家の隣に田んぼがあり、交通量も少なく、本当に静かな環境でした。ご近所付き合いもあり、人とのつながりが強く助け合いがあり、子どもを育てる環境としてパーフェクトな場所だと思います。親戚同士も仲が良く、従妹や祖父母もすぐ近くに住んでいて、会いたい時に会うことができました。その環境がとても好きで、自分の子どもにも味わわせてあげたかったなとすごく思います。現在、親戚は福島県、群馬県、千葉県にいます。浪江町は、田舎で何もありませんでしたが、会いたいときに友達や親戚に会えていた環境は、幸せなことだったなと今になって思います。近くにみんながいる震災前の環境に戻ることができたなら、子どもを連れて浪江町で生活したいと思うくらい良い場所です。

◆沖縄に来て良かった

沖縄は、海で遊んだり、遠出してキャンプに行ったりと、子どもと一緒に遊べる環境がたくさんあります。友達家族と遊びに行くのがとても楽しいし、外で遊んだほうが子どもたちも強くなっていくような気がします。沖縄で経験したこと、出会った人のことを考えると、沖縄に来て本当に良かったと思います。
今、子どもがやってみたいと言っていたスケートボードを子どもと一緒にやっています。これからも海に行ったり、スケートボードをしたり子どもたちと過ごす生活を大切にしていきたいです。

木幡　涼子さん（権現堂）

取材者：ＮＰＯ法人くびき野ＮＰＯサポートセンター　橋詰
取材日：９月27日　「平成29年12月 広報なみえ掲載」

浪江のことは片時も忘れたことはない

▲浪江の風景や当時の思い出を懐かしむ木幡さん

現在、新潟県柏崎市で一人暮らしをしている木幡さん。
浪江町の写真を見ながら、浪江への思いをお話しいただきました。
ここ柏崎も良いところだけど、浪江に戻れるなら戻りたいと語られていたのが印象的でした。

◆あっという間の６年

震災発生から今日までの６年間は長いようであっという間でした。震災当時の事は今でも鮮明に覚えています。

経験したことのないものすごい揺れで、自宅のブロック塀も倒れるほどでした。すぐに家を飛び出し、近くの駐車場にみんなで集まり、様子を見守っていました。翌朝、孫たちが一度戻ってきたタイミングで近くの体育館に避難しようとしましたが、満員で入ることができませんでした。その時はどうしようかと思いましたが、ガソリンスタンドを探しながら、しばらく車で移動を続け、なんとか空いている体育館があるという情報を聞き、そこに駆け込みました。

その後各地を転々とし、平成23年８月から福島市の仮設住宅に入りました。最初は知り合いもいなくて寂しさや不安を感じていましたが、偶然友人が隣の部屋に来てくれたのでとても助かりました。毎日お互いの部屋に遊びに行っては、夕方までお茶を飲んだりいろいろな話をしたりして過ごしていました。現在、その友人は南相馬市の公営住宅にいるようです。時々思い出しては寂しくなりますが、元気でいてくれていることを願っています。

趣味で作っているクラフトパッチワーク▶

◆故郷は特別な存在

約５年過ごした福島市の仮設住宅から、昨年の６月に現在の新潟県柏崎市にやってきました。慣れない土地ですが、頑張って日々生活しています。

浪江にいた頃の趣味はグラウンドゴルフでした。普通のゴルフよりも簡単で老若男女で盛り上がれるスポーツです。柏崎でも機会があればやってみたいと思っています。また、浪江にあった「マリンパークなみえ」にもよく行っていました。特に屋上にあるレストランでの食事はすごく楽しみでしたね。最近では、手芸にもはまっています。

震災から６年が経ちましたが、浪江の自宅は庭なども手入れできていないので、まだまだ荒れたままです。幸いにも自宅の損傷はほとんどありませんでしたが、現在も周りに帰宅者はいないようです。それでも浪江のことを忘れた日はありませんし、いつか帰りたいといつも思っています。もちろん柏崎も素晴らしい所です。周りの環境もいい所ですが、やはり故郷はいつまでも特別な存在です。

いつかまた、笑顔で暮らせる浪江に戻ってほしいと心から願っています。

叶谷　勇郎さん・タケ子さん（幾世橋）

取材者：特定非営利活動法人寺子屋方丈舎　江川
取材日：９月10日　「平成29年12月 広報なみえ掲載」

海の仕事を懐かしみながら

▲浪江のご自宅でのお二人。
これからもお元気でお過ごしください。

勇郎さんは、震災前は漁師で、家族で海の仕事をしながら生活してきました。かつての暮らしを懐かしみつつ、今はご夫婦で家庭菜園などを楽しみながら暮らしていらっしゃいます。

震災後リフォームした町内のお家に、新しい住人の猫と一緒に帰ってきたお二人に現在の生活についてお話しいただきました。

◆親子で船に乗り魚を獲った毎日

勇郎さん　震災前には漁師として、仕事をしていました。息子家族も同居していたので、夜明け前から息子と二人で漁に出て、獲ってきた魚は、妻が港で仕分けてと、家族全員で海の仕事をしていました。カレイやヒラメ、小女子（こうなご）やシラスと季節ごとの魚を獲っていました。

タケ子さん　夫とは昭和46年に結婚しました。酒もタバコもたしなまない、真面目で実直、仕事熱心な夫のことを、私の母もすごく気に入っていました。

勇郎さん　震災後は、家族全員で山形へと避難しました。福島から避難して来たということで快く受け入れていただき、深く感謝しています。一方で、複雑な気持ちもありました。「いろいろ配慮していただいて、本当にありがとうございます。」という気持ちと、誰が悪いとかではなく、人に世話になっている自分の存在がどこかやるせない、そんな気持ちになりましたね。

◆話をするとつながれます

勇郎さん　福島に戻り、相馬の仮設住宅での暮らしは５年４か月余り続いたので、運動不足で足が弱り、歩けなくなっては大変だから、毎日のように散歩をしました。

タケ子さん　近所の女同士でたくさん話をしました。昔からの知り合いというよりは、仮設で知り合った人が大半です。筋トレ体操をやったり、カラオケをしたりと、楽しい時間を過ごしました。

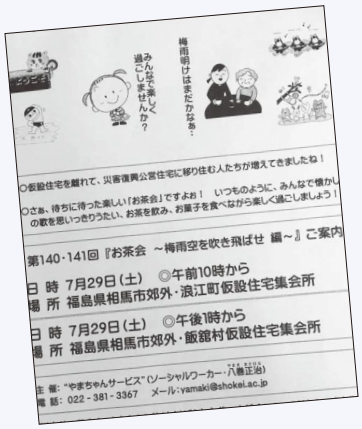
勇郎さん　仮設住宅時代の縁は今でも続いています。月一回は誘い合ってカラオケに出掛けています。歌が上手いわけではないけれど、話をするのがいいんです。

◆家庭菜園が喜び

勇郎さん　息子家族は、現在、神奈川県に住んでいます。時折、息子家族の所へ行きますが、その度に孫の成長の早さを感じています。あれから7年目です。あっという間で、暮らしも変わりましたが、今は家庭菜園が一つの楽しみとなっています。海では、体を使って暮らしていたので、陸に上がると何にもできないから、せめてナス、キュウリ、アスパラ、にんじん、レタスなどの野菜を作りながら、夫婦で暮らしています。

タケ子さん　漁師は、昔から食べることが基本です。いっぱいご飯を作って、家族全員仲良く食事をしていた頃のことを思い出します。また、南相馬で買い物をしてストレスを発散しています。

どこにいても、家族は一緒。息子家族にも今の暮らしを受け入れ、笑顔で暮らしていってほしいです。



▲いまでも届く仮設からの便り

渡辺　満さん・ルメ子さん（権現堂）

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ　掃部・古山
取材日：10月30日　「平成30年１月 広報なみえ掲載」

浪江町のためにも若い人が働ける場を

渡辺満さんとルメ子さん夫妻は、JR浪江駅近くで息子さん（三代目）と会席、割烹、食堂「都」を営んでいらっしゃいました。名物のＢ級グルメ「なみえ焼そば」が食べられるお店としても知られ、観光バスでやってくるお客さんにも好評だったそうです。

現在は、あさか野バイパスと郡山コスモス通りに挟まれている郡山市静町に居を構え、夫婦水入らずでお暮らしです。ルメ子さんの今の楽しみは、復活した７区の女性たちの集まり「菜の花会」で出かける旅行。今年は、12人で岳温泉に泊まり親睦を深めてこられたそうです。一方、満さんは趣味のゴルフやマージャンを存分に楽しんでおられるとのことです。

◆津島から郡山、そして埼玉へ

大地震の後、最初に向かったのが高瀬球場でした。そこで「請戸の方は津波で何もない」という話を聞きました。寒いし、暗くなってきたので一旦、自宅に戻り翌12日、お父さん（夫の満さん、以下同じ）と息子と３人で津島に向かいました。津島の避難所はどこも一杯で、戸惑っていたら息子の友人からもっと遠くへ避難するようにと電話があり、郡山の義妹宅を目指すことにしました。その前に血圧の薬をと思って診療所に寄ったら１週間分くらい渡されました。明日にでも自宅に帰るつもりでいたので「なぜ？」と思いました。途中、白い防護服を着た人もいて不安になりました。道に迷っている間にガソリンが無くなり、困っていたところを親切な方に助けていただき、義妹宅に着きました。翌13日、早朝からガソリンスタンドに並んで埼玉の長女の家を目指しました。

▲満さんとルメ子さん。お話は尽きず、ついつい長居をしてしまいました。

◆忘れられない娘の機転と郵便局の温情措置

埼玉で困ったのはお金でした。何しろ着の身着のままで来たので。お父さんは免許証を持ってたけど、私は何もなかった。娘の機転と郵便局の温情で救われました。実は、平成22年にうちの店が福島民友新聞に紹介されたことがありました。私たちの写真入りの記事を娘が持っていて、それを見せたら本人と確認していただき通帳の再発行ができました。その後、息子は単身でいわきへ。今も息子はいわきです。

◆浪江を思わない日はありません

平成23年５月、埼玉から横向温泉に引っ越して仲間１００人と暮らし始めました。飯舘村の方々も避難して来られ、みんなで交流したんですよ。お父さんは、自治会長を引き受けて支援物資の調達に奔走しました。遠方から物資を届けに来てくださる方もいてねえ。そういった方たちとは、今でもお付き合いを続けています。

平成23年８月、郡山市西田町のアパートに引っ越しました。大熊町や富岡町、津波で自宅を流された人も住んでいて、隣近所仲が良かった。毎日散歩したり、デコ屋敷に行ったり、今思うと楽しい日々でした。やがて「家を買った」とか「家を借りた」とかいう話が聞こえてくるようになりました。私たちは当初、埼玉にいたので町の状況がよく分かっていませんでした。「もう浪江には帰れない」みたいな雰囲気もあって、平成26年３月にこの家を求めました。

今のところは二人で生活できていますが、知らない町で家族も隣近所もバラバラです。浪江は良かった。浪江を思わない日はありません。切ないのは復活した「菜の花会」の仲間のご主人が、60代で２人、70代で２人も亡くなってしまったことです。避難がなかったら長生きできたかもと思うと残念でなりません。

浪江町には雇用の創出を期待しています。お父さんは、今も店・事業をやってみたいと言っていますがもう80歳です。若い人が働けるような場所ができることを願っています。

山田　千鶴さん（権現堂）

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ　古山・掃部
取材日：10月30日　「平成30年１月 広報なみえ掲載」

自然豊かな福島の「この新しい家」で生きていきます

東北自動車道郡山インターチェンジから郡山市内に向かう国道49号と市内環状線「あさかのバイパス」の交差点から程近い閑静な住宅街に、山田さんが経営する美容室「すずらん」があります。お住まいと一緒の真新しい建物で「ここで今年初めての冬を迎えるのが、ちょっと心配」と笑っていらっしゃいました。

お店は毎日営業。山田さんは「車を使わない近所の方々、特に高齢者の方に利用していただきたいと思っていますし、気軽に立ち寄れる居場所づくりもできたら」とおっしゃいます。現在、美容専門学校に通う娘さんが卒業を迎え、母娘が一緒に立ち働く様子を見ることができる日も近いかもしれません。

◆県北地域を転々とし、川崎市での暮らしは約6年に

震災が起きた3月11日は、遅めの昼食をとりながらテレビを見ていました。突然の揺れに、大型テレビを押さえながら、2階のたんすが崩れたらどこへ逃げようかなどと考えていました。

当時、小学校3年生と6年生の娘たちが通っている近くの小学校に駆け付けるために外に出ると、ほこりとガスの臭いがして、3軒隣の家は大きく傾き、水道管が破裂していました。子供たちは校庭に避難して無事でしたが、娘たちは「机ごと傾いたのが怖かった」そうです。

ほかの子供たちの保護者がみえるまで小学校にいた後、自宅に戻ると、仕入れに行っていた2軒隣の小料理屋さんから津波を見たという話を聞き、父と娘2人を連れ、財布だけ持って上ノ原の叔母の家に避難しました。仕事中だった夫とは、夜に合流できました。

翌朝、津島の体育館へ向いましたが、途中でキノコ雲を見たんですよ。もっと遠くへと思い、川俣町の小さな体育館に。余震で揺れる度に外に出ましたね。ガソリンが少なかったので南相馬市の夫の姉や飯舘村の姉の親戚宅にもお世話になりました。その後、神奈川県川崎市の妹のところに避難し、近所の市営住宅に入居して約6年を過ごしました。福島から避難した人たちも同じ団地に結構いらっしゃいましたが、交流はあまり無かったです。

その間、美容師をしたり、ヘルパーの勉強をして介護施設で働いたりしました。仕事は思ったよりハードでしたね。単身赴任が多かった夫は家族と暮らすために、一緒に介護の仕事をしました。今は設備関係の仕事をしています。

▲山田さん（左）と、取材の時に遊びに来られていた、幼馴染の八橋久枝さん（右）。
八橋さんは浪江町生まれ。双葉町に嫁ぎ、現在は福島市在住。偶然、遊びに来られていました。

◆私たちの新しいふるさとが、ここ

娘たちの進学のこともあり、福島に戻りました。郡山市を選んだのは、市内に浪江町の人も多いし、二本松市や本宮市に友人知人が多く、首都圏に行くのも便利だと思ったからです。土地を探して約1年、自宅兼美容室を建てました。私も昔からのお客様も浪江のお店のイメージが強いだけに、どうやって皆さんが入り易いお店にしていくのかがこれからの課題ですね。

私にとってふるさとは、あって無いようなものです。でも、川崎市に住んでいた時は季節感も無く、ただ空白の時間だけが過ぎたように感じています。時間の経ち方も人の動きも、全く違いました。

一番の楽しみはママさんバレーでしょうか。年1回の浪江町長杯バレーボール大会で浪江町のバレーボール仲間に会えるのが楽しみで続けています。

美容室「すずらん」
営業時間：９時～19時
毎週月曜日、第１・第３日曜日は休み
TEL 070（2039）8787

ともに生きる会

代表 **森川マツ子**さん（加　倉）
岩崎　弘子さん（川　添）・**佐藤　　恵**さん（請　戸）
熊川　善雄さん（権現堂）・**犬丸富美子**さん（富岡町）

取材者：特定非営利活動法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ　鍋嶋
取材日：10月10日　「平成30年１月 広報なみえ掲載」

帰った人にも、戻れない人にも誇れる浪江町に

▲松戸の支援者の方たちも一緒に、「お好み焼き」を囲んで、おしゃべりを楽しむ。

「ともに生きる会」は、平成27年７月に、千葉県松戸市に避難している森川さんや浪江町民、富岡町などの他市町村の方と、震災直後から、支援活動を行ってきた松戸市民の皆さんが一緒になって立ち上げました。

名前のとおり、避難者と支援者が一緒になって、バス旅行や手芸の会、手作り品の販売などを企画・実施しています。森川さんが、以前に借上げ住宅として住んでいたマンションの一室を使用し、心地良く、賑やかな笑い声が絶えない「居場所」ができています。

代表の森川さんと参加された皆さんに、今の暮らしと思い、今後についてお話しいただきました。

◆今の暮らしと思い

森川さん　震災後２年くらいの間は、避難指示区域外の方たちとも一緒に、いろいろな企画をやっていたのですが、時が経つにつれ「あの人たちは、東電の賠償や国の補償があるからいいよね」といったことが耳に入ってくるようになったんです。国や東京電力が決めたことで、自分たちでは、どうしようもないことと分かっていても、お互い感情的になってしまいます。境遇の違う人たちが一緒に活動する難しさを感じていたところ、応援してくれていた松戸市民の方たちから、新たに団体を立ち上げたらと勧められ、「ともに生きる会」を立ち上げました。

岩崎さん　松戸市常盤平で暮らしています。震災の１～２年前に両親は亡くなり、夫婦二人の生活です。震災後の避難生活を思うと、両親には、大変な思いをさせなくて良かったかなと思います。松戸の暮らしにも、何とか慣れてきました。以前のように、ご近所で、挨拶したり、「お茶飲み」したりすることは、ほとんどありませんが、それも当たり前になってしまいました。長男も、こちらで就職が決まりました。浪江に帰る機会も少なくなり、お墓もこちらに移そうかと考えています。

佐藤さん　次男夫婦と一緒に、印西市で暮らしています。二世帯住宅を建ててもらって、恵まれていると思いますが、震災があっての同居で、お互いに気まずくなることも少なくありません。長男が、福島県内の復興公営住宅に入居申込みをしていて、来年には引っ越す予定に

▲左から、熊川さん、岩崎さん、森川さん。

◀この日のプログラムは「トートバッグづくり」。指導する佐藤さん。

▲地元の銀行に「粘土教室」の作品が飾られました。

なっているので、一緒に、福島に戻ることも考えています。

「ともに生きる会」には、最初から関わってきました。やっぱり、浪江の人同士だと本音で話ができます。今のこと、将来の暮らしを相談するのは、「ともに生きる会」の仲間たちです。

熊川さん 震災前は、父親から引き継いだ「大室屋」で終日、厨房に立っていました。町では、みんなが知っている店で、結構賑わっていました。震災から6年半。元の場所で、店を再開することは考えていません。前のような賑わいが戻ってくるとは思えませんし、心臓のバイパス手術を受けて、体力に自信もなくなりました。「ともに生きる会」の企画には、ほぼ毎回参加しています。ほかの場所だと、賠償金の話になることが多くて、気重になってしまうことが少なくありません。ここだと、みんなで好きなことをして、お昼を食べて、気楽におしゃべりして、ゆっくりできる。有り難いです。千葉での暮らしも長くなったけど、近所付き合いのある人は2～3人で、浪江での暮らしとは比べようもありません。

震災前から、収集していた骨董品が生きがいになっています。浪江にいた時には、参加できなかった東京での甲冑の審査会にも、参加できるのはうれしいですね。甲冑仲間も何人かいて、励みになっています。

犬丸さん 次男と埼玉で、一緒に暮らしています。「ともに生きる会」の企画には、毎回、電車を乗り継いで来ています。皆さんに誘ってもらえて有り難いです。ご近所で、おしゃべりできる人はなかなかいません。こうして、皆さんの顔を見ると安心します。

◆ともに生きる会の今後

森川さん 「ともに生きる会」の事務所兼交流スペースの家賃の負担を考えると、長くとも、あと2年くらいかなと思っています。震災から6年半経ちましたが、今すぐに、浪江町に帰ることは難しいと思っている人が多い中、同じような状況にある町民同士が本音で話ができる場は大事だと感じています。松戸市民の人たちと避難している町民が、力を合わせて「ともに生きる」ことを実現できればと思います。

常磐道を通り広野辺りに差し掛かると、ホッとする自分があります。心が癒されるというのか、安心するのか、都会での生活の重圧を和ますことができるような気がします。これからの浪江はどうなって行くのか？遠く離れていても応援していくつもりです。今は、まだ月に1～2回くらいは、帰ることができますが、10年も経ったらどの様になるのか。1日1日を精一杯生活しているので、先の事など全く分かりません。いつも不安が頭を過ぎ去ります。帰った人にも、戻れない人にも、誇れる浪江町になればと願います。

「ともに生きる会」の定例企画

★1月10日(水) 10時～　話しすっぺ会
　気軽に話しをしながら楽しみましょう

★1月12日(金) 10時～　粘土教室
　誰にでも出来る手に優しい粘土教室「クリスマス・お正月に向けた作品づくり」

★1月20日(土) 10時～　「手作り品販売会」
　会　場：五香駅（新京成線）西口
　販売品：ビーズ小物、バック、帽子、ストラップ、手袋など

佐藤　実さん（酒田）

取材者：地域社会デザイン・ラボ　中島
取材日：11月1日　「平成30年1月 広報なみえ掲載」

いずれは浪江に戻りたい

▲原ノ町駅近くの喫茶店でお話しくださる佐藤さん

いわき市に避難中の佐藤さんは今年、平成30年に還暦を迎えます。

現在、平日は南相馬市で単身赴任生活、週末はご自宅でご家族やお孫さんと楽しく過ごされていますが、「家内とも同郷の友人とも、何を話していても最後には浪江の話になる」とのこと。

「とても語り尽くせない」という浪江への思いをお話しくださいました。

◆3月15日にいわき市に避難

私はいわゆる会社人間で、震災が起こった時も非番だったんですが、翌日には南相馬市の職場に出勤し、社員の安否確認などを行いました。それから職場が閉鎖されることになり、平成23年3月15日に家族といわき市に避難したんです。当時、大学生だった娘がいわき市のアパートに住んでいたので、そこに転がり込むという形でした。

その後、娘は結婚して孫も授かりましてね。私のほうはその年の12月に職場が再開したので、平日は南相馬市で単身生活、週末は家内と両親の住むいわき市の家で過ごしています。一人暮らしで多少の不便はありますが、南相馬市は浪江から近いのでホッとする気持ちもあるんですよ。

◆浪江の自宅跡に通う日々

元々住んでいたのは酒田地区で、浪江高校の近くです。川沿いで地盤がやわいため建屋が大きく損傷し、今は整地して植木くらいしか残っていません。家を取り壊す前は、時間があるかぎり家に戻って写真を撮りました。集落の様子を眺めているだけでも気持ちが落ち着くので、今も時々車で部落を一周します。幼なじみの数人は昼間だけ浪江に戻って農業をやっているから、今日は来てるかなって覗いたり、昔学校に通った道とか友達と遊んだお寺さんとかを回ったり。

いろんな思い出がありますのでね。私は地区の芸能保存会に入っていて、獅子舞もやっていました。正月やお祭りのときは皆で太鼓をたたきながらこの道を通ったなとか、そういったことが次から次に思い出されて、つい目頭が熱くなることもあります。

◆いずれは浪江に帰りたい

職場の同僚とも、泣いたり笑ったりしながら震災当時のことをよく話します。みんな、避難した時はすぐに浪江に戻れるだろうと思っていたんですよね。震災後は仕事が忙しく、慌ただしく過ごしている間に約6年半が過ぎてしまいました。でも未だに心の整理はついていなくて…。命が助かっただけで有り難いんだと自分に言い聞かせていますが、やはりあんな事が起きなければよかったのにと思わずにはいられません。

家内ともいろんな話をしますが、最後には浪江の話になって「いずれは帰るよね」って確認し合ってるんです。実際にどうなるかは分かりませんが、孫が中学校を卒業する頃、自分たちが70歳過ぎる頃に戻れるといいねって。

役場の方は本当に一生懸命やってくれていると思います。それでも復興にはまだ時間がかかりそうですね。壊れたままの建屋もまだ目立つので、特に駅前をもっと明るい雰囲気にしていただけるといいなと思います。そして高齢者の住民も暮らしやすい環境が整い、将来的には孫が戻ってきても安心して遊べるような場所ができたらと。

孫は今1歳2か月で、私の顔を見ると「抱っこ」とせがむんです。はい、可愛いですよ(笑)。子供世代、孫世代が誇れるようなふるさと・浪江を取り戻せたらと心から願っています。

木幡　遥香さん（権現堂）

取材者：東北圏地域づくりコンソーシアム　竹内
　　浪江町復興支援員宮城県駐在　村田
取材日：11月12日　「平成30年２月 広報なみえ掲載」

陸上・砲丸投げに打ち込んだ中学生活
全国大会で思わぬ再会が

▲最後に出場した大会の様子

北海道東部、オホーツク海沿岸の斜里町ウトロ地区で暮らしている木幡さん。
中学に入って本格的に始めた砲丸投げで全国大会に出場。
そこで偶然、浪江の頃の知り合いと再会したお話をしてくださいました。

◆斜里での暮らし

小学３年生の時にウトロに来て、地区の小中一貫校に通っています。小学生はみんな複式学級の小さい学校です。生徒数が少ないので、先生も生徒もみんなお互いに知っています。運動会や文化祭も小中一緒。運動会は保育所も一緒になってやっています。

家から学校までは２・５キロメートル程あります。急な坂道ばかりで、毎日そこを歩いているので、ウトロの子はみんな足が速く持久力があります。

冬はスキーウェアに雪靴で登校しています。来た当初は寒さの程度が全く分からず、普通の長靴を履いたり、ベンチコートを着たりしていたのですが、とても寒くて耐えられませんでした。浪江の頃は冬も普通の靴を履いていたので、びっくりでした。

朝は、家の雪かきから始まります。玄関の扉が凍ってしまうので、お湯をかけて氷を融かしながら開けます。雪や風がとても強い日は、学校も休みになってしまいます。

◆陸上競技に打ち込んだ中学生活

小学校の頃から陸上をやりたいと思っていたのですが、浪江にいた頃はまだ2年生で部活に入れませんでした。斜里に来てからすぐに少年野球チームに入りました。すると野球をしている様子を見ていた陸上部の顧問の先生が、陸上部に入らないか、と勧誘してくれたのです。

陸上部に入った頃は四種競技をしていたのですが、砲丸投げで全国大会に出た先輩がいたこともあり、途中から砲丸投げを専門にするようになりました。

学校だと、平日、長くても２時間半しか練習できないので、毎週土曜日、網走の競技場まで１時間かけて通って練習していました。夏休みはほぼ毎日でしたので、母は送迎で大変だったと思います。

投てきでも走る練習はします。投げる時に早く動くことが大事なので、短距離をすごく走ったり、タイヤを付けたロープを腰に巻いて走ったり、さらに、それに重りをつけたり。冬は、雪が降って外では練習できないので、階段を走ったり、体育館で筋トレをしたり、室内用の砲丸を使って練習したりしています。

◆全国大会で浪江の頃の知り合いと再会

北海道内の大会で標準記録を超えることができたので、中学３年生の今年は、８月に熊本で開かれた全国大会に出場してきました。そこで、浪江の頃、幼稚園と小学校で一緒だった愛沢誠也君と偶然再会することができました。

最初は、誠也君が全国大会に出ていることは知りませんでした。オホーツク地区から出場した知り合いが８００ｍに出ていたので、その予選の結果をインターネットで見ていたら、たまたま彼の名前を見つけたのです。親同士も知り合いでしたので、連絡を取ってもらい、翌日、熊本で会うことができました。こんな偶然あるのかとびっくりしました。震災後はお互いどこに住んでいるのかも分からず、すごく久し振りでしたがお互い顔は覚えていました。お互いの親も再会を喜んでいました。

その後、９月に北海道ジュニア陸上選手権に出て、陸上部は引退しました。大会に出ると北海道各地のいろんな先生から声を掛けてもらえます。陸上がなければ、こういうつながりはなかったと思います。しばらくは、学校のテストが多いので勉強がメインになってきますが、それが終わったら、また練習を再開して、陸上を続けていきたいです。

▲全国大会で愛沢誠也さんと偶然の再会

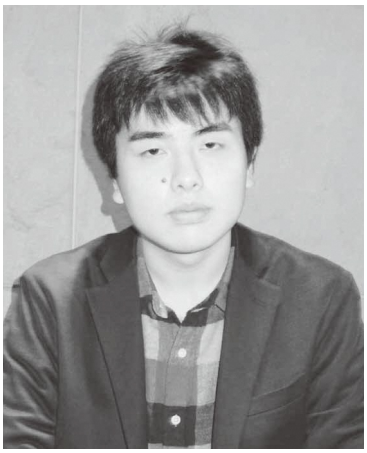
玉野　紘成さん（請戸）

取材者：認定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ　古山
取材日：11月22日　「平成30年２月 広報なみえ掲載」

いろんな経験をこれからの人生に活かしていきたい

震災当時、小学6年生だった玉野さんは今年、大学１年生になりました。東北福祉大学に決めた理由は、3.11の経験を活かして人の役に立てる資格を取りたいと、社会福祉士を目指して大学生活を過ごしています。

第69号（平成29年３月号）に登場いただいた横山和佳奈さんとは請戸小学校の同級生。大震災と原発事故からの避難という大変な体験を礎に社会貢献を願う頼もしい若者にまた一人、出会うことができました。


▲「僕を見かけたら、また集まろうよ。連絡をください」とおっしゃっていました。

◆町内から南相馬市、福島市へ。さらに、県外へ避難

卒業式を次の週に控えたあの震災の時は、ホームルームの時間で教室にいました。全員がまず校庭に避難し、大平山に走って逃げました。山頂に待機していたのですが、しばらくして下に降りてみると、山の際まで波が来ていて移動できない状況になっていました。でも、じっとしていても仕方ないので役場を目指そうということになり、動き始めました。紙芝居『請戸小学校物語』でもよく知られていますが、いわき市の運送会社の方にトラックの荷台に乗せていただき、役場へ無事に避難し、先に避難していた母と祖母に会えました。

母は、「役場の４階から請戸が津波にのみ込まれるのを見た」と言っていました。いわき市で仕事をしていた父とは連絡が取れませんでしたが、祖母と母、妹と一緒に町内の親戚の家に避難しました。

翌日、家族と親戚の車２台で南相馬市小高区の浮舟会館に避難しました。本当は津島を目指すつもりだったのですが、大渋滞のために断念しました。そこには半日も居ずに原町区の石神小学校に移り、父と二日振りに再会できました。

その後、福島市の飯坂温泉にある「パルセいいざか」に。飯坂町では断水はしていましたが、久し振りにお風呂に入れました。食料も十分にあり、店も開いていて、僕も妹も靴を買うことができました。ガソリンも何とか入手して、車で千葉の叔母の元に。千葉に行っても、漁業関係の仕事をしていた両親は、福島との間を行き来していました。

◆友達も土地勘もなく、つらかった千葉での日々

僕は千葉の中学校に入学しました。最初の頃は周りの人たちとうまく付き合っていたのですが、だんだん難しくなりました。同級生も先生もとても気を遣ってくれて、親切にしてくださったのですが、その気遣いが重たくて、申し訳なくて、負担が大きかったです。例えば、ある時、震度３くらいの地震が起こり、僕が卓球台の下に潜り込んだのを見て笑った同級生を、先生がきつく叱ったんです。似たような出来事が何度かありました。

中学２年生の時、両親の仕事のことや学校のこともあり、相馬市に引っ越しました。浪江と同じ浜通りで土地柄も一緒だし、言葉のイントネーションも同じで、やっと安心しました。近いうちに相馬市の山側に家ができます。海のそばで暮らしてきた僕たち家族ですが、母が「ここまで波は来ない」と言って決めました。

僕は浪江町に戻るのは無理だろうと思っていますが、産業があって学校が再開し、ライフラインや病院、サンプラザみたいなお店などが整備され、町としてきちんと機能するようになれば、帰る人は増えるのではないかなと思っています。

野球部の仲間を始め、友達と会う機会はあるのですが、まだ消息がわからない友人もいます。この記事を読んでくれた友人から連絡があるとうれしいです。

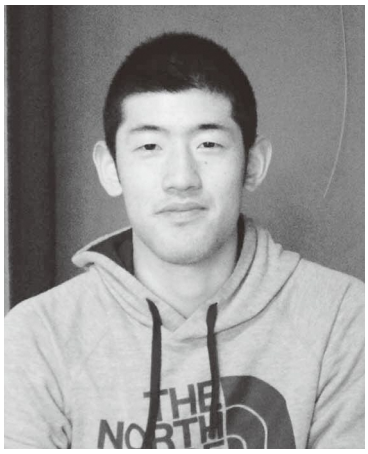
渡部　友綱さん（末森）

取材者：認定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ　古山
取材日：12月11日　「平成30年２月 広報なみえ掲載」

仕事で「ありがとう」と言われる時が、一番うれしい

渡部さんは双葉地方広域市町村圏組合浪江消防署に勤務され、５年のキャリアを持つ消防士です。救急車で病人やけが人を病院に搬送することも多く、とてもやりがいのある仕事だとおっしゃいます。

震災の時は南相馬市原町区から山形県、福井県へと避難したため、浪江にいた頃の友達とはどうしても疎遠になってしまっているとか。この記事を通じて、そんな方々とのご縁が再びつながりますように。



▲国家資格である救急救命士を目指したいと将来の抱負を話してくださいました。

◆避難先の福井県で高校３学年に転入、進学

東日本大震災が起きた日、僕は福島県立双葉高校の2年生でした。午後から野球部のバッティング練習を始めて間もなく、今までに経験したことのない大きな揺れに部員全員が地面に伏せました。その時は、逃げることなど考えられませんでした。学校がすぐに避難所になり、近所の人たちや車椅子の方が集まってきました。津波警報が出たので先生の車で高台に避難することになり、僕たちも手伝いましたが、高齢者が多かったので何往復もしました。それから双葉中学校に避難しましたが、野球着のままだったので寒かったですね。両親が迎えに来てくれたのは、結構暗くなってからでした。家は地震の被害はほとんど無く、レトルトカレーをストーブで温めて食べました。

曾祖母と祖父母、両親、妹２人の８人家族でしたが、国道１１４号の避難による渋滞を避けたことや、看護師をしている母の仕事の都合もあり、数日後に曾祖母と祖父母たちは親戚の所に、僕と妹たち、両親は南相馬市の母の実家に避難しました。１週間近くお世話になった後、山形県米沢市の体育館へ。何百人もの人たちが避難していました。毎朝散歩をしながらガソリンスタンドの様子を見に行き、父に連絡をして車に給油をしました。

福井県勝山市へ再び避難し、僕は福井県立勝山高校に転入しました。野球部ではレギュラーをとれるか不安でしたが、１週間後に迫った春の県大会のメンバーに選ばれ、出場しました。チームは１回戦で敗退しましたが、レギュラー候補だった部員に替わっての出場でしたので、その人の分まで頑張ろうと思い、個人の成績はなかなかのものでした。

◆小さい頃から憧れた消防士になるために

高校卒業後、福井市内の専門学校に進学しました。震災前に怪我（けが）で救急車のお世話になったり、震災の時の東京消防庁や双葉地方広域市町村圏組合消防本部の活動を知ったりする中で、やはり消防士になって人の役に立ちたいと思いました。両親や妹たちは相馬市に戻ったので一人暮らしを始めました。一人暮らしで、一番困ったのはお米の研ぎ方。母に電話して教えてもらいました。

消防士になって一番強く印象に残った出来事は、平成29年４月末に浪江で発生した山火事です。12日間燃え続けて鎮火しましたが、双葉町と浪江町にまたがった消防車も入れないような悪条件の山中だったので、背負いバッグで山に登っては状況を確認しました。

双葉消防署浪江臨時庁舎には約30人が所属し、丸1日ごとの交替勤務。みんなでご飯を作ったり、筋トレなどをしたりしながら、いざという時に備えています。夜、パトロールをするのですが明かりも無く、震災以前とは全く違う景色に悲しくなる時もあります。町に必要なものは、まず総合病院。高齢者のために一番大事だと思いますし、町民の方々が一緒に楽しめる場所もできたらいいですね。

相馬市大野台第８応急仮設住宅自治会

会長 小松　康二さん（請戸）・副会長 佐藤　聖子さん（立野）
会計担当 山田　和恵さん（小丸）・防犯担当 髙野　豊さん（幾世橋）

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ　古山・松田
取材日：１月13日　「平成30年３月 広報なみえ掲載」

「相馬市大野台第８応急仮設住宅自治会」役員さん方に聴く、これまでとこれから

▲集まってくださった自治会役員の方々。
左から小松さん、佐藤さん、髙野さん、山田さん。

相馬市大野台第８応急仮設住宅は、平成23年８月に入居が始まりました。それから６年半以上が過ぎ、今年３月末にその役目を終えます。

今回、その自治会役員６名のうち、４名の方々が集まってくださいました。

お二人ずついる副会長と会計担当のうち、お二人は残念ながら欠席されましたが、自治会設立から２代目に当たる会長、副会長、会計と防犯担当の役員さん方に約６年にわたるこれまでの活動と、皆さん方それぞれのこれからに向けたお話をじっくりお聴きすることができました。

◆大野台第８応急仮設住宅自治会の活動を振り返って

小松さん　大野台第８応急仮設住宅は単身赴任者が約半分で、日中は人が少ないんですよ。

私たちの役員会では、赤い羽根ボラサポ※の支援を受けて五つの活動グループを作りました。自治会役員がそれぞれ代表を務める四季の会、クラフト会、花の会、カラオケ、そしてコスモス農園です。仮設を出る人も次第に多くなってメンバーが少なくなりましたが、今もそれぞれで活動を継続していますよ。

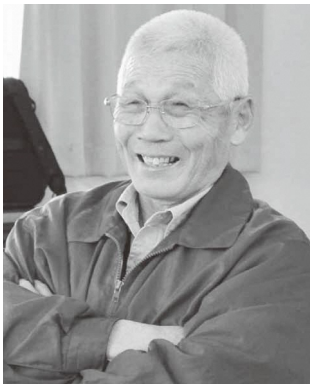
※社会福祉法人中央共同募金会・赤い羽根「災害ボランティア・ＮＰＯ活動サポート募金」の略。

山田さん　最初は個人の方が手芸の会として始めました。その後にクラフト会になり、講師を招いて楽しくクラフトテープで作品を作り、活動をしていました。

佐藤さん　私はカラオケ。会の名称は特に付いていませんが、中心的なメンバーは７～10名で、毎週金曜日の夜６時30分から定期的に開催し、みんな楽しみにしていました。

髙野さん　私は花の会。各世帯に配られたプランターの花を育てたり、水やりをしたり。植え替えの時には団地の10～20人の方々が手伝ってくれましたね。

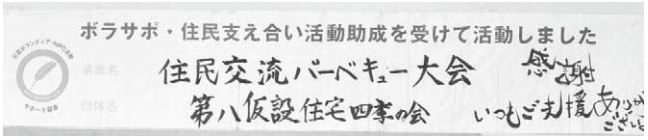
小松さん　季節の行事をやるのが、四季の会。「なみえ復興祭」は昨年秋までで13回開催しました。大野台第８応急仮設住宅ばかりでなく、隣の団地との交流も図りながら、借上げ住宅の人たちなども参加して毎回５００～１，０００人。餅つき大会もやりましたね。


▲髙野さん（防犯担当）

▲佐藤さん（副会長）

▲小松さん（会長）

▲今年３月末、その役目を終えることになった大野台第８応急仮設住宅



▲赤い羽根ボラサポの横断幕が今も集会所に掲示されていました。活発に活動されていた様子が伝わります。

▲インタビューの様子

イベントの景品は熊本の大嶌屋さんから年２回送っていただいているミカンで、この５年で約50トン。その上、何度も福島に来られているんですよ。本当にお世話になりました。

だから平成28年熊本地震の時は支援物資を送りましたよ。卓上コンロとかおしめ、日用品なんかでしたね。水は、大きいボトルより小さいのを配った方がいいという私たちの経験から、５００ミリリットルのボトルを６００本送りました。

コスモス農園ではみんなで野菜を作って、集会所脇の直売所で即売をしました。

◆これからの暮らしへの想い

小松さん　この大野台第８応急仮設住宅は３月で閉鎖になりますが、それなりの付き合いとなじみがありました。家がまだ無い人は南相馬市八方内の団地へ移れるそうですが、本当に町民のことを考えているのでしょうか。浪江町へ４００人帰ったといっても役場の関係者以外は高齢者が多いですしね。

私自身はこれからどうなるか分かりません。会社勤めを続けているかもしれないし、浪江町で仕事をするかもしれないです。浪江に道の駅ができるでしょ。支援でお世話になった大嶌屋さんと一緒に全国物産館や果物の通販をやりたいと思っています。物産は全国のおいしいものをセレクトして、新商品のフルーツタルトや米粉パンも扱いたいですね。

住まいは、今の職場が相馬なので、いわきの自宅には休日に帰っています。母が南相馬市の県営北原団地に居るので、平日は様子を見に行ったりしています。

佐藤さん　南相馬市鹿島区に家を造りましたが、浪江町の家は田畑の作業があるので、昨年４月にリフォームしました。

大野台に入居した頃は気持ちがとても不安定で、私は自治会の活動に助けられたんです。自分一人の時間をなるべく少なくして活動に没頭していれば気持ちが晴れたんですよ。

高野さん　浪江には震災の次の年から入り、農業を続けていますよ。最初の年は猪の被害があって電気柵を建てましたが、今は10種類くらいの野菜を作っています。自分たちの食べる分だけですけれども。家はぐしの修理だけだったし、浪江に帰って体が動くうちは農業を続けるつもりですよ。

幾世橋地区は70戸。そのうち帰った家が５軒、週末に通っているのが２軒。だけど、肉や魚を買うのはまだまだ不便ですね。

小松さん　今の浪江町には65歳以上の高齢者が７、８割。買い物は原町まで行かなきゃならないから、車を運転しない人にとって移動販売や配達のサービスは必要でしょ。浪江診療所はできたけど、総合病院は無い。せめて隣町の歯科と眼科に行くために、マイクロバスを巡回させるとかできないものでしょうか。

住んでみなきゃ分からないことが多いし、町民の帰還を促すよりも、これから何十年もかかる廃炉作業に関わっている７,０００人もの人たちを生かした仕事づくりが求められるんじゃないかと思っています。

山田さん　昨年10月に相馬市に家を造り、引っ越しました。「実家が相馬だから、いいよね」って言われることも多いんですけど、浪江にはお墓もあるし、17年間家族と暮らした小丸の家が私の本当の家なので、寂しいなぁって思います。

今は仕事をしています。何年か後には資格を取りたいと考えています。

それから、来年は次男の成人式です。次男の当時大堀小６年生だった同級生やお母さん方に会いたいですね。

畑中　武さん（中浜）

取材者：地域社会デザイン・ラボ　中島
取材日：12月23日　「平成30年２月 広報なみえ掲載」

いろんなことがありましたが、今はとても幸せです

▲ご自宅にて
仲睦まじい武さんとヤイさんご夫妻

第41号（平成26年11月号）に掲載された畑中さんは、86歳になられました。

津波で流された浪江のご自宅跡は堤防建設の用地となり、帰還できない状態に。また震災後は会津・東京で避難生活を送るなど苦労されましたが、現在はいわき市に建てた二世帯住宅で、奥様のヤイさん、息子さん夫婦、３人のお孫さんに囲まれ、元気にお過ごしです。

◆請戸小の広坂校長先生に感謝

震災当日、うちの家族は７人のうち５人が間一髪で津波から逃れ、九死に一生を得たんです。

私たち夫婦と息子のことは前にお話したので今回は省きますが、当時、請戸小学校に通っていた２人の孫は広坂校長先生のおかげで助かりました。「請戸の奇跡」と呼ばれているように、広坂先生がすぐに正しい判断をし、自ら生徒を背負って避難してくれたことで請戸小は全員が無事でした。

おかげで、私の一番上の孫は今年成人を迎えることができ、二番目の孫は高校２年生になりました。広坂先生にはどんなに感謝しても感謝しきれません。

◆家族に支えられて

私の方は震災後にぜんそくを患い、一時はちょっと歩いただけでも息が切れました。でも東京にいる娘が貴重な漢方薬を送ってくれたり、息子が青汁を買ってきてくれたり、家族みんなが気遣ってくれたおかげで回復しました。以前、前立腺がんを患ったこともあり、妻は食事にすごく気を遣ってくれています。お米は３分づきの胚芽米、魚を毎日食べ、肉や野菜類をバランス良く。それから病後に良いと聞いて、野ブドウの実を35度の焼酎に漬けたものを朝晩、杯１杯ぐらいずつ飲んでいます。おかげさまで今年86歳の誕生日を迎えることができました。震災・津波で家も家財も全て無くしましたが、今はとても幸せです。大平山霊園にお墓も作ったことも安心感につながっています。

◆孫たちの成長と浪江の絆

私は生まれも育ちも浪江で、船大工を生業にしておりました。自慢するわけじゃありませんが、我ながらよく働いたし、行く先々の造船所で褒められ、腕には自信がありました。亡くなった父親が「よく働け。そして絶対に嘘をつくな」と、遺言みたいによく言っていたので、この言葉が体に染み付いているのかもしれません。私の子供たちも努力をいとわないところが一番の長所だと思います。

孫たちにもそういう一面があるのか、三番目の孫は小・中・高と11年間、学校を無欠席。私が尋常小学校から中学校までの８年間無欠席だったという話をしたら、孫は「おじいちゃんの記録を破る」と言って、それを実行したんです。そういう孫たちの成長を見るのが楽しみです。

そして浪江の友人たちとも手紙のやり取りはずっと続いていて、心の支えになっています。私は時々、福島民報やＮＨＫのラジオに原稿を投稿するんですが、「福島民報、見ましたよ」と連絡をいただくことも。「浪江のこころ通信」も皆さんの近況が分かるので、毎号とても楽しみにしています。これからも浪江の絆を大事にし、家族に感謝し、健康に気を付けて明るく過ごしたいと思っています。

長岡　新一さん・仁子さん（苅宿）

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ　佐藤
取材日：12月22日　「平成30年３月 広報なみえ掲載」

今年、浪江に帰ります！

第６号（平成23年12月号）掲載時、金婚式を迎えたご夫妻が、５年後のエメラルド婚式を浪江で迎えたいとおっしゃっていました。あれから６年、浪江でエメラルド婚式がかなえられたのを願って再び伺いました。

▲６年前と同じ、笑顔がすてきな長岡さんご夫妻

６年前、「今、一番の思いは『浪江に帰りたい。必ず浪江に帰る。』」のタイトルで掲載されました。あれから６年、まだ「必ず帰る」を果たせずにいますが、やっと今年（平成30年）12月に浪江に帰れる目途がつきました。何年も人が住んでいなかった家は荒れるがままで、思い出いっぱいの家を思い切って壊すことにしました。けれど、なかなか工事の順番が回ってこず、やっと除染、除却が済み、今は新築工事が始まるのを待っているところです。ただ、今「浪江に帰る」が現実になり、たびたび浪江に足を運ぶようになって都度線量を測り、その日の天候などで線量に変動が見られたりすると、除染が済んだとはいえ、不安がよぎります。今年、私たちは浪江に帰りますが、子や孫はもうしばらくしてから…と正直複雑な心境でいます。

浪江では米や野菜を作り、浪江の土に生き、土の恵みを得て暮らしていましたので、こちらでも土に親しむことが、何より自分たちらしく居られると思いました。運よく、今の家の近くに畑を借りることができ、今は家族や知人の喜ぶ顔を思い浮かべながら、野菜作りに励んでいます。

妻は「武扇会」という踊りの会主をしていて、震災時は３月13日に発表会を控え、棚塩公民館で練習中でした。大きな揺れに練習を切り上げ、何とか帰路に就くも、警戒のため海に向かうパトカーとすれ違った時の警官の顔が今も思い出され、「私は生かされているとつくづく思う」と言います。今はまだ浪江に帰れずにいますが、体は浪江になくても浪江の文化だけは守っていきたい、文化こそが町の人をつなぐことができる、と県内各地のお弟子さんたちのもとを回っています。危なっかしかった高速道路の運転も、どうにか慣れてきたようです。毎年開くことができるようになった交流会が、励みになっているようです。目下の懸案は、標葉神社の浦安の舞の後継者探しです。平成26年４月に明治神宮で行われた昭憲皇太后百年祭で、浪江の巫女（みこ）５人が堂々と舞ってくれ、私まで誇らしかったです。この浦安の舞を何としても絶やしたくないと思うのですが、いかんせん集って練習することがままなりません。紙面をお借りして、「来たれ～浪江女子！」

６年前、「次のエメラルド婚式（結婚55周年）は浪江で迎えたい」と話しましたが、かなえることはできませんでした。今年12月に新居が完成したら、２年遅れのエメラルド婚式を浪江で祝います。二人そろって健康だからこそ、迎えられる結婚記念日だと思います。生かされた命を、日々の暮らしを、大切にしていきたいと思います。